

令和7年度「国語に関する世論調査」の結果の概要

調査目的・方法等

調査主体：文化庁国語課（業務委託先：一般社団法人中央調査社）

調査目的：現在の社会状況の変化に伴う日本人の国語に関する意識や理解の現状について調査し、国語施策の立案に資するとともに、国民の国語に関する興味・関心を喚起する。

調査時期：令和8（2026）年 1月13日～3月3日

調査対象：全国16歳以上の日本国籍を有する者

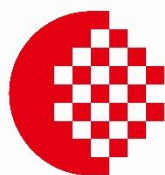
調査対象総数 6,000 人

有効回答数（率） 3,777 人 （ 63.0% ）

調査方法：郵送法

※ 令和2（2020）年度から郵送法で調査を実施している。令和元（2019）年度以前は面接聴取法で実施していた。

※ 調査方法の異なる令和元年度以前の調査結果は参考値となるため、比較には注意が必要である。



文化庁

備 考

- ・ 百分比は、各質問の回答者数を 100%として算出し、小数第 2 位を四捨五入した。そのため、百分比の合計が 100%にならない場合がある。内訳とその小計においても同様である。
- ・ 百分比の差を示す「ポイント」については、小数第 1 位を四捨五入して示した。
- ・ 一つの質問に二つ以上の回答をすることができるもの（調査票で「○は幾つでも」、「○は三つまで」等と二つ以上の回答個数が可能である質問）では、回答率の合計が 100%を超えることがある。
- ・ 「付問」は、前問で特定の回答をした一部の回答者のみに対して続けて行った質問である。
- ・ 図表等に「n=1,000」等と示されているのは、その問いの回答数の総数である。特に示されていない場合は今回調査全体の有効回答数となる。
- ・ 図表等で回答の割合を「-」と表示しているのは、回答者がいなかった場合である。「0.0」と表示してあるのは、回答者が 1 人以上いるが百分比の小数第 2 位を四捨五入した結果が「0.0」となったものである。
- ・ 各質問の冒頭で、（*P.10）等と示されたページ数は、本調査の報告書において、該当する質問が記載されているページである。

目 次

I 国語とコミュニケーションに関する意識

<問1>	国語への関心	1
<問1付問>	どのような点に関心があるか	3
<問2>	国語に関して国に期待すること	5
<問3>	日常生活において、文字を手書きする頻度	7
<問4>	印刷されたものと手書きが加えられたものに対する感じ方	9
<問5>	文字を手書きする習慣についての意識	10
<問5付問1>	大切にすべきであると思う理由	12
<問6>	日常生活において、縦書きで文字を読んだり書いたりする頻度	14
<問6付問>	縦書きで文字を読んだり書いたりするところ	16
<問7>	縦書きで文字を読んだり書いたりする習慣についての意識	18

II 方言に関する意識

<問8>	共通語と方言についての考え方	19
<問9>	日本国内で消滅の危機にある言語や方言についての考え方	21
<問10>	方言を記録し、保存する取組についての考え方	23

III 敬語に関する意識

<問11>	これからの敬語の在り方	25
<問12>	望ましい呼び方（課長に部下が呼び掛けるとき）	27
<問13~15>	外部の人への言い方（会社の受付の人・学校の先生・病院の医師の場合）	29

IV 言葉遣いと外来語表記に関する意識

<問16>	二つの言い方（「れる／られる」「せる／させる」など）	33
<問17>	外来語の表記	38

V 言葉遣いに対する印象や慣用句等の理解

<問18>	使うことがある言葉か（「ツーカー」「なるはや」等）	43
<問19>	気になる言葉か（「ツーカー」「なるはや」等）	45
<問20>	どちらの意味だと思うか（「ひもとく」「気が置けない」等）	47

I 国語とコミュニケーションに関する意識

* 報告書におけるページ数

<問1> 国語への関心 (* p.3)

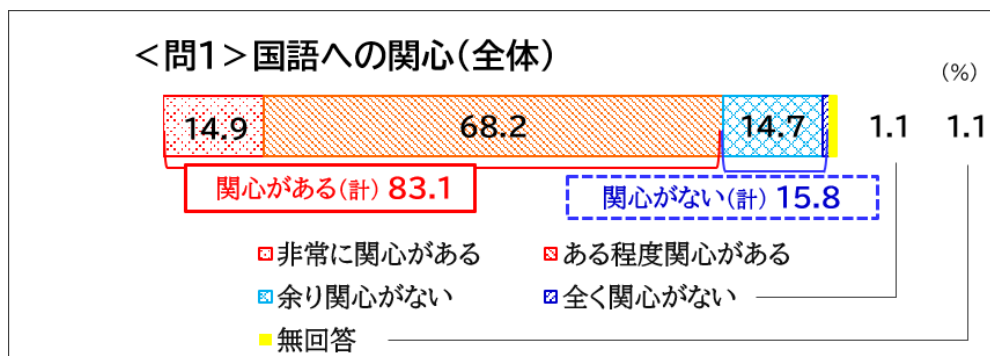
— 「関心がある(計)」が8割台 —

〔問1：質問〕

あなたは、日常の言葉遣いや話し方、あるいは文章の書き方など、国語について、どの程度関心がありますか。 (一つ回答)

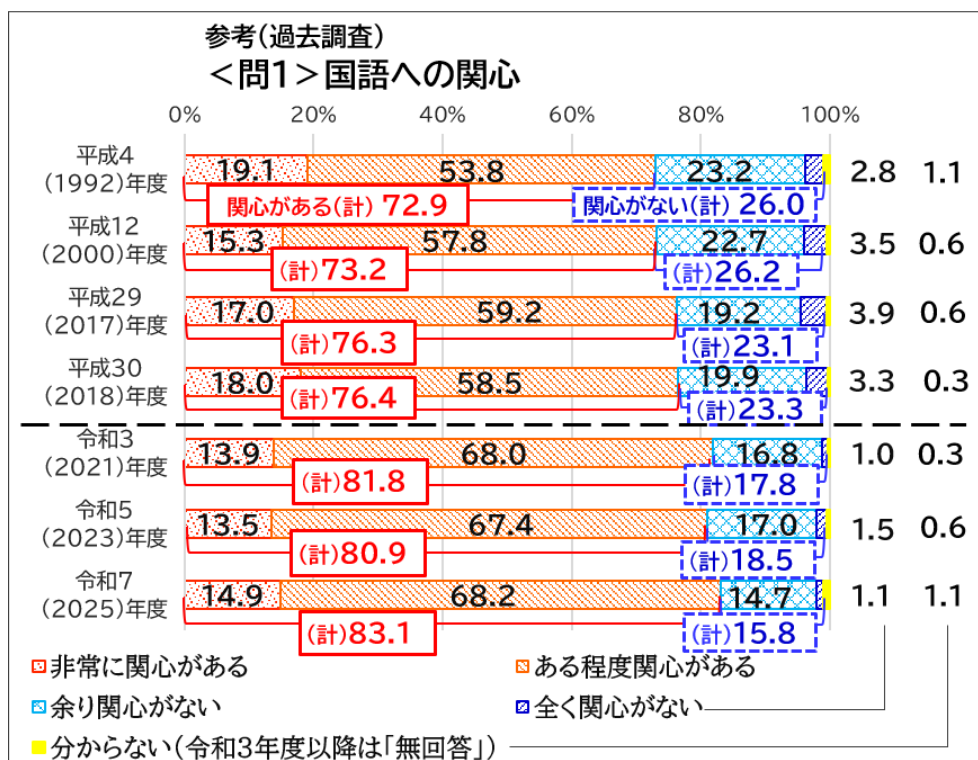
〔問1：全体の結果、(参考) 過去の調査結果〕

結果は次のグラフのとおり。(選択肢はグラフに示している。)



「非常に興味がある」を選択した人の割合が14.9%、「ある程度関心がある」が68.2%で、この二つを合わせた「関心がある(計)」は83.1%となっている。一方、「全く関心がない」は1.1%、「余り関心がない」は14.7%で、この二つを合わせた「関心がない(計)」は15.8%となっている。

また、過去の調査結果(平成4、12、29、30、令和3、5年度)を下のグラフに示す。



* 調査方法の変更のため、令和元(2019)年度以前の調査結果は参考値となり、比較には注意が必要。

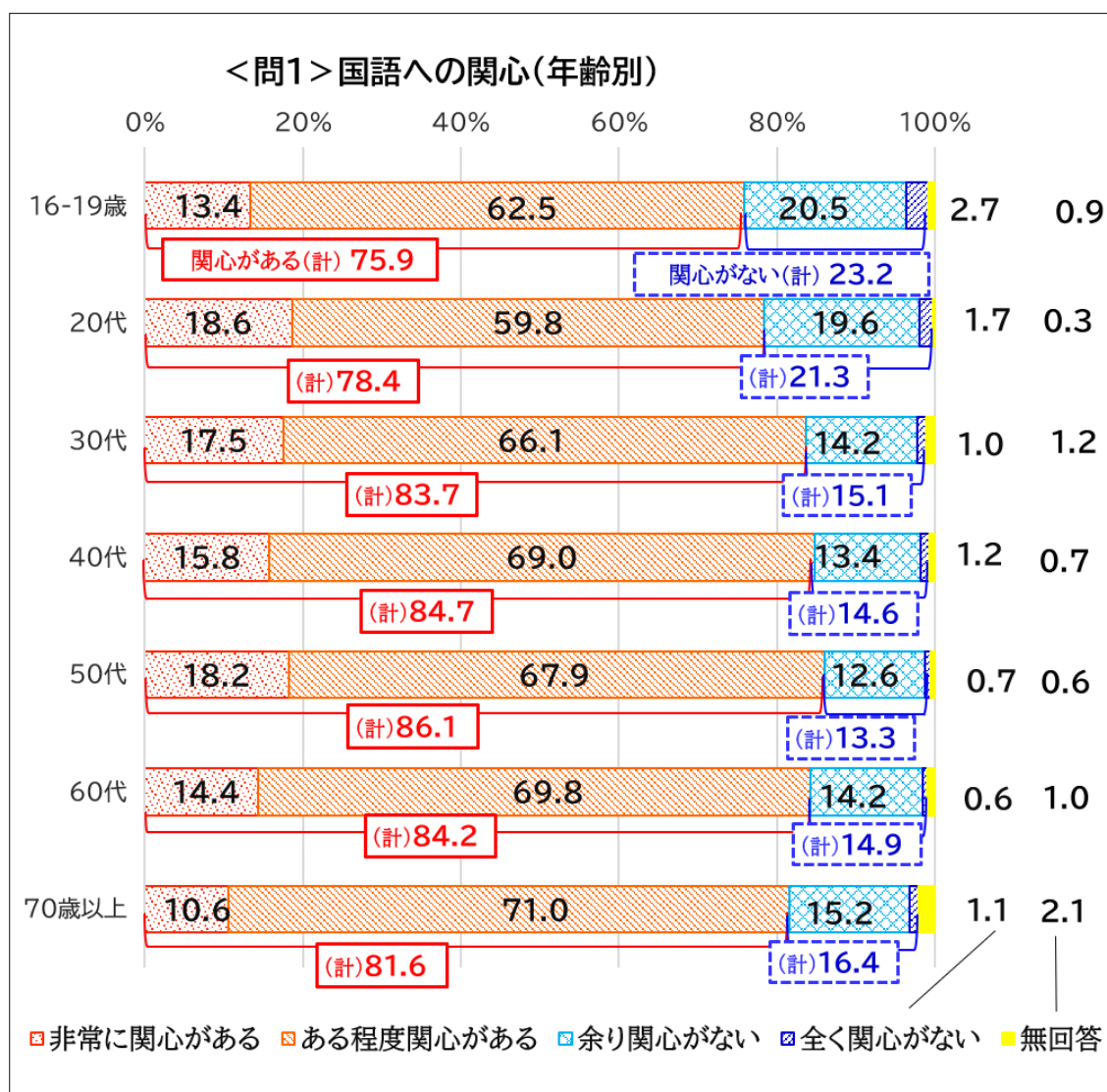
なお、調査方法が変わったため、令和元（2019）年度以前の調査結果については参考値となり、今回（令和7年度）の調査結果との比較に注意が必要である。

過去の調査結果においては、「関心がある（計）」の割合が増加傾向にあった。

〔問1：年齢別の結果〕

年齢別の結果は、次のグラフのとおり。

「関心がある（計）」は、50代で8割台後半と、他の年齢層より高くなっている。



<問1付問> どのような点に関心があるか (* p.5)

— 「日常の言葉遣いや話し方」が 7割台後半と最も高い—

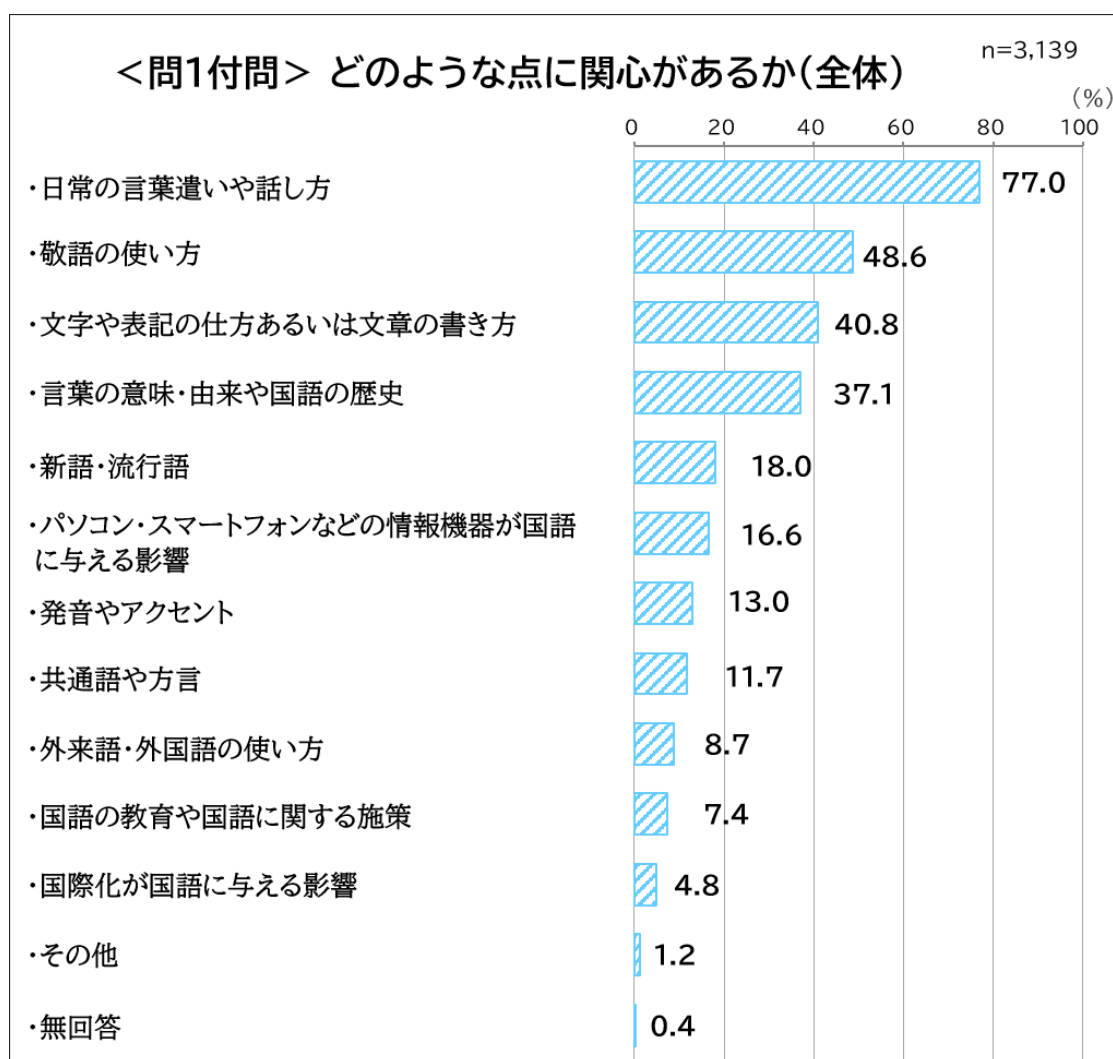
〔問1付問 : 質問〕

(問1で「非常に関心がある」、「ある程度関心がある」と答えた人(全体の83.1%)に対して) 国語のどのような点に関心がありますか。(三つまで回答)

〔問1付問 : 全体の結果〕

結果は次のグラフのとおり。(選択肢はグラフに示している。)

「日常の言葉遣いや話し方」を選択した人の割合が他に比べて高く、77.0%となっている。次いで「敬語の使い方」(48.6%)、「文字や表記の仕方あるいは文章の書き方」(40.8%)、「言葉の意味・由来や国語の歴史」(37.1%)となっている。

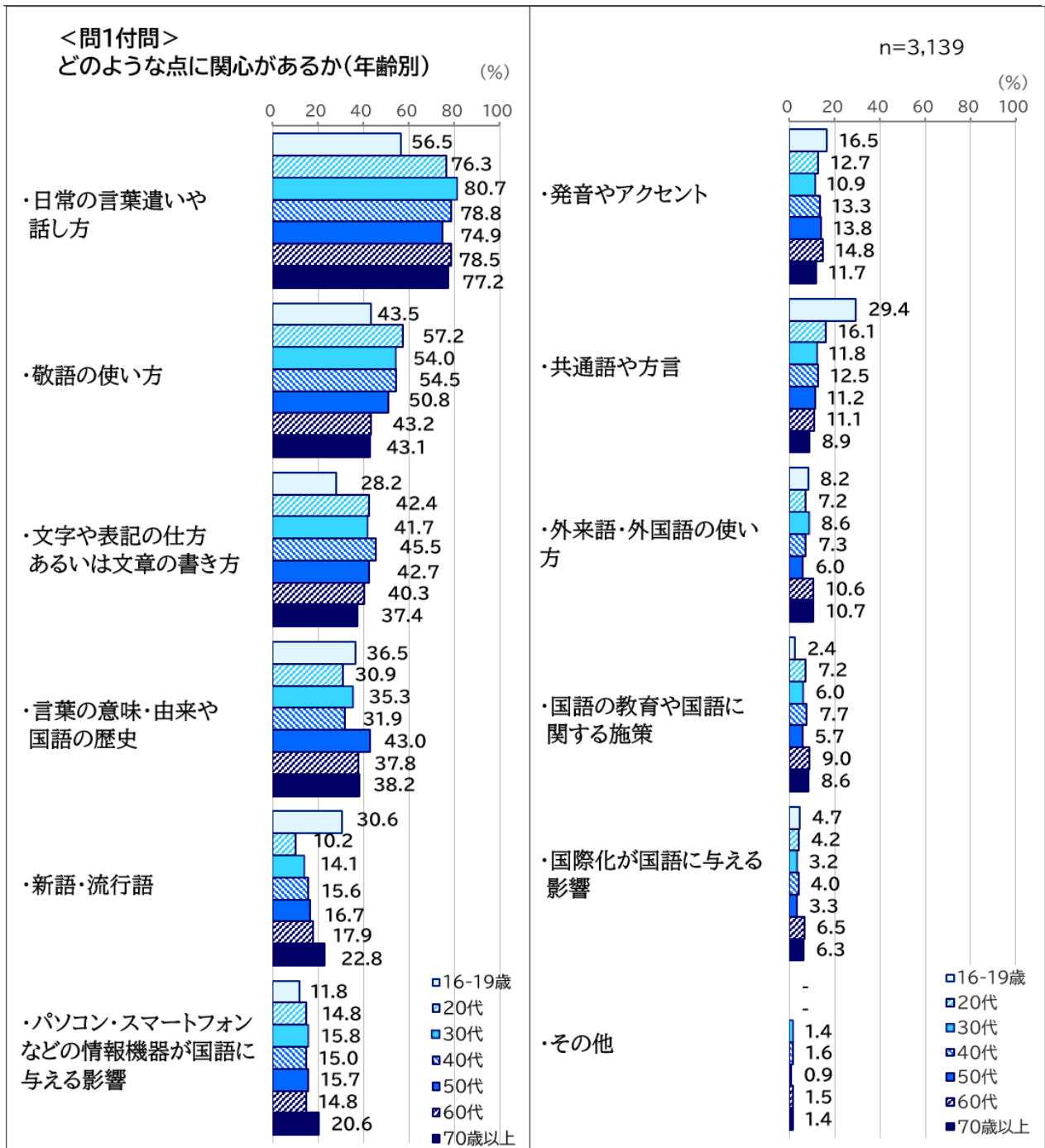


〔 問1 付問：年齢別の結果 〕

「敬語の使い方」を選択した人の割合は、20～40代で他の年齢層より高くなっている。

「文字や表記の仕方あるいは文章の書き方」は、40代で、「言葉の意味・由来や国語の歴史」は、50代で、他の年齢層より高くなっている。

「新語・流行語」「共通語や方言」は、16～19歳で約3割と、他の年齢層より高くなっている。



<問2> 国語に関して国に期待すること (* p.8)

— 言葉遣いや伝統の継承に関するものが5割弱 —

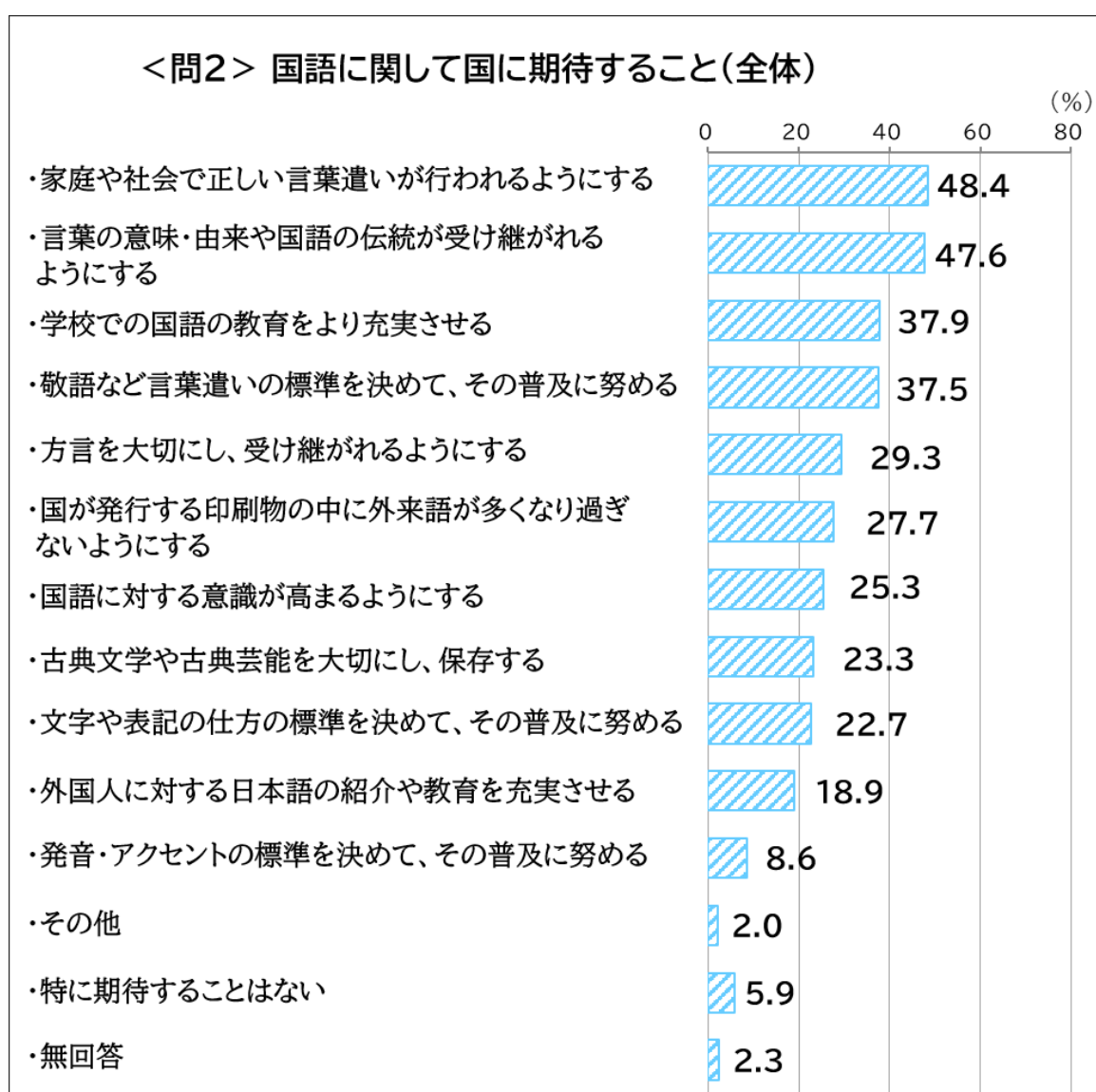
〔問2：質問〕

あなたは、国語に関して、国に期待することがありますか。 (幾つでも回答)

〔問2：全体の結果〕

結果は、次のグラフのとおり。(選択肢はグラフに示している。)

「家庭や社会で正しい言葉遣いが行われるようにする」を選択した人の割合が48.4%と、他に比べて高くなっている。次いで「言葉の意味・由来や国語の伝統が受け継がれるようにする」(47.6%)、「学校での国語の教育をより充実させる」(37.9%)、「敬語など言葉遣いの標準を決めて、その普及に努める」(37.5%)となっている。

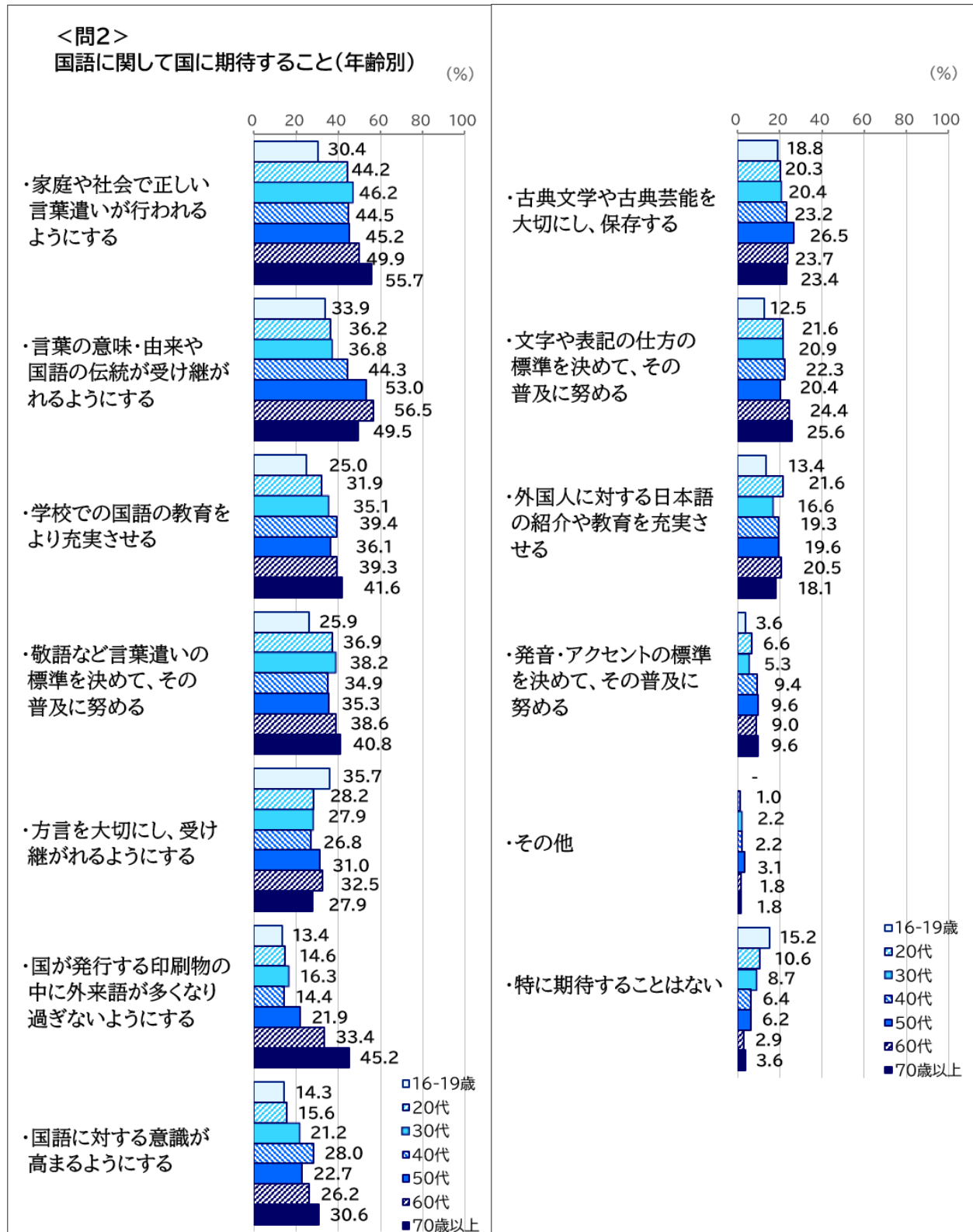


〔問2：年齢別の結果〕

年齢別に見ると、次のグラフのとおり。

「家庭や社会で正しい言葉遣いが行われるようにする」を選択した人の割合は70歳以上で、「言葉の意味・由来や国語の伝統が受け継がれるようにする」は50～60代で、それぞれ5割台と、他の年齢層より高くなっている。

「学校での国語の教育をより充実させる」「敬語など言葉遣いの標準を決めて、その普及に努める」「国が発行する印刷物の中に外来語が多くなり過ぎないようにする」は、70歳以上で4割台と、他の年齢層より高くなっている。



<問3> 日常生活において、文字を手書きする頻度 (* p.11)

— 「ある(計)」が約7割—

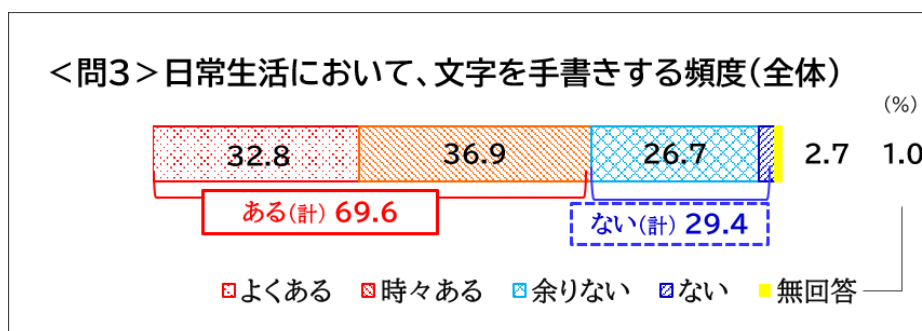
〔問3：質問〕

あなたには、日常生活において、文字を手書きする機会がありますか。それとも、ありませんか。
(一つ回答)

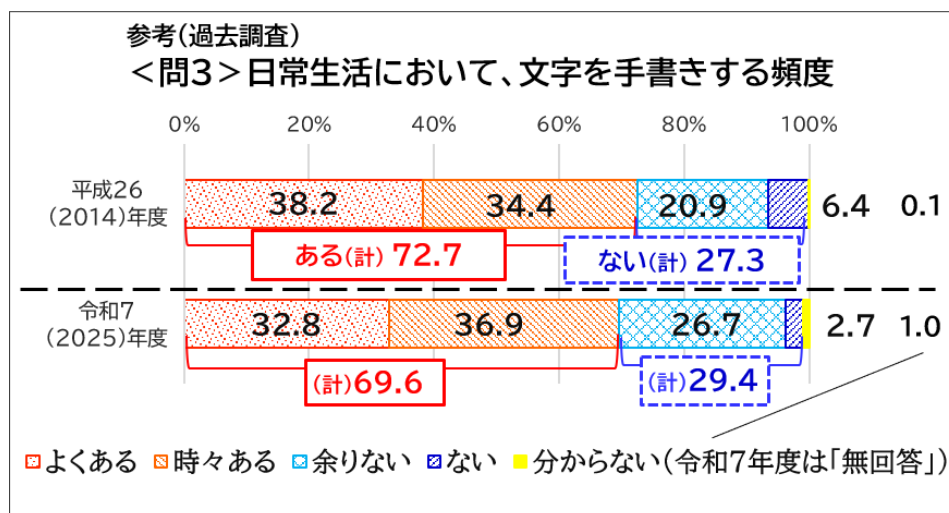
〔問3：全体の結果、(参考)過去の調査結果〕

結果は次のグラフのとおり。(選択肢はグラフに示している。)

「よくある」が32.8%、「時々ある」が36.9%で、これらを合わせた「ある(計)」は69.6%となっている。一方、「ない」が2.7%、「余りない」が26.7%で、これらを合わせた「ない(計)」は29.4%となっている。



また、過去の調査結果(平成26年度)を下のグラフに示す。

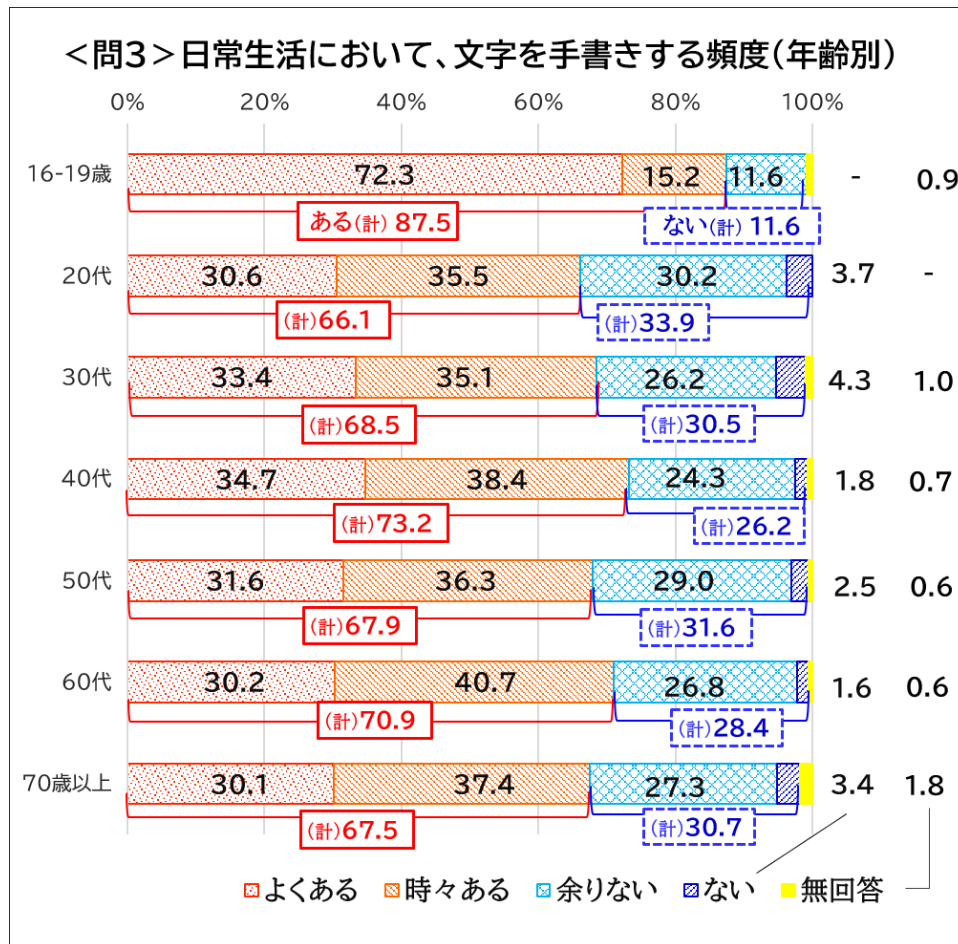


* 調査方法の変更のため、令和元(2019)年度以前の調査結果は参考値となり、比較には注意が必要。

〔 問3：年齢別の結果 〕

年齢別に見ると、次のグラフのとおり。

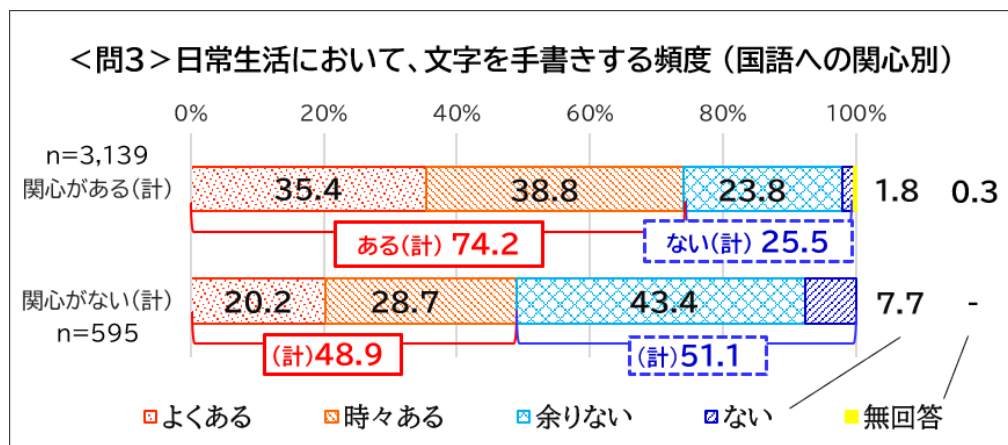
「ある(計)」を選択した人の割合は、16～19歳(87.5%)で最も高く、次いで40代(73.2%)となっている。



〔 問3：「国語への関心」別の結果 〕

問1「国語への関心」別に見ると、次のグラフのとおり。

「ある(計)」を選択した人の割合は、国語への「関心がある(計)」と答えた人(74.2%)の方が「関心がない(計)」と答えた人(48.9%)より高くなっている。



<問4> 印刷されたものと手書きが加えられたものに対する感じ方 (* p.13)

— 「手書きされたものや手書きが一言加えられたもの」が良いとするものが8割台 —

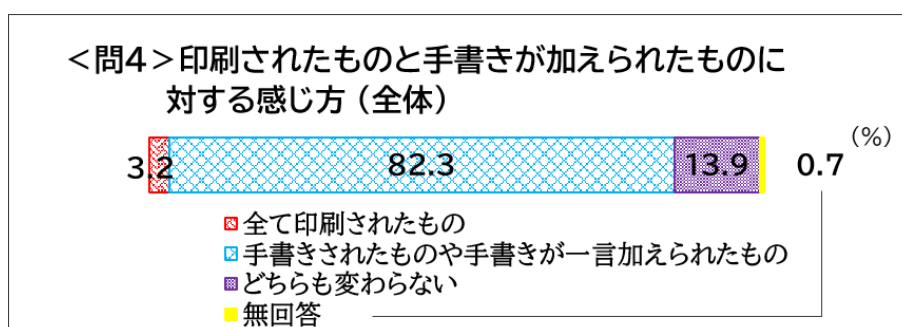
〔問4：質問〕

年賀状や挨拶状などの手紙やはがきは、印刷されたものが多くなっていますが、あなたは、文字の部分が全て印刷されたものと文字の部分が手書きされたものや手書きが一言加えられたものとでは、どちらが良いと思いますか。 (一つ回答)

〔問4：全体の結果〕

結果は、次のグラフのとおり。(選択肢はグラフに示している。)

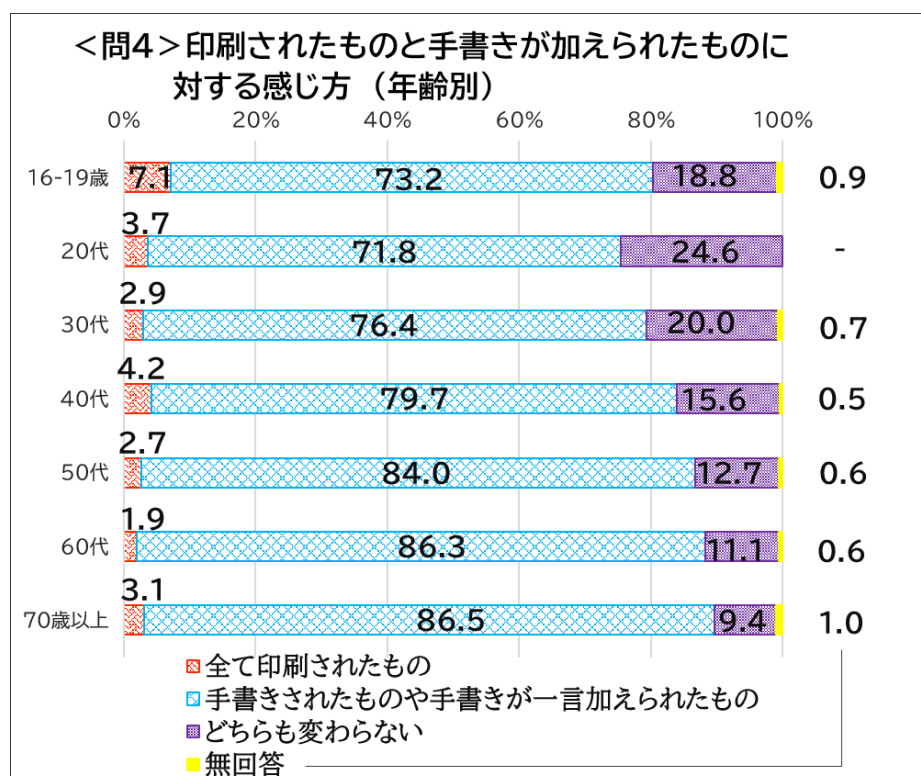
「手書きされたものや手書きが一言加えられたもの」を選択した人の割合が82.3%となっている。一方、「全て印刷されたもの」が3.2%、「どちらも変わらない」が13.9%となっている。



〔問4：年齢別の結果〕

年齢別に見ると、次のグラフのとおり。

「手書きされたものや手書きが一言加えられたもの」を選択した人の割合は、60代以上で8割台後半と、他の年齢層より高くなっている。「どちらも変わらない」は、20代で2割台半ば、30代で2割と、他の年齢層より高くなっている。



<問5> 文字を手書きする習慣についての意識 (* p.15)

— 「大切にすべきであると思う」が約8割—

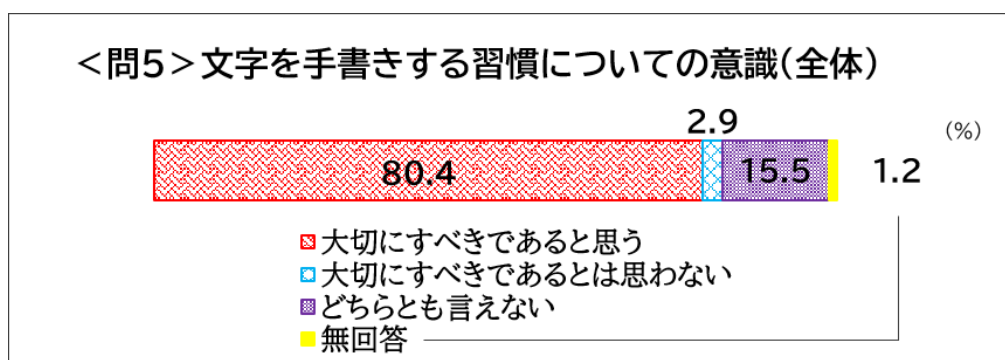
〔問5：質問〕

文字を手書きする習慣は、これからの時代においても大切にすべきであると思いますか、それともそうは思いませんか。 (一つ回答)

〔問5：全体の結果〕

結果は次のグラフのとおり。(選択肢はグラフに示している。)

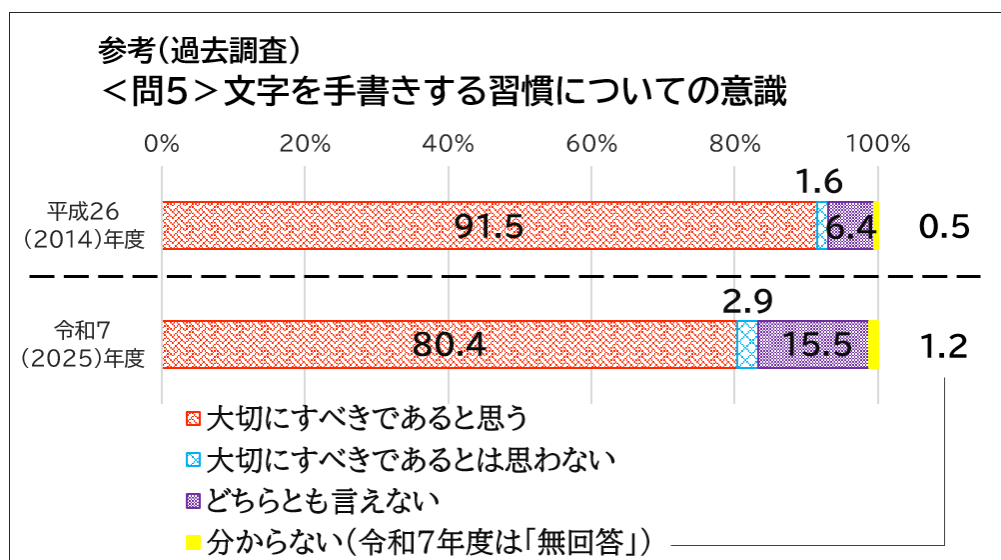
「大切にすべきであると思う」を選択した人の割合が最も高く、80.4%となっている。一方、「大切にすべきであるとは思わない」が2.9%、また、「どちらとも言えない」が15.5%となっている。



〔(参考) 問5：過去の調査結果〕

調査方法が変わったため、令和元(2019)年度以前の調査結果については、今回(令和7年度)の調査結果との比較に注意が必要だが、過去の調査結果(平成26年度)を参考値として下のグラフに示す。

過去の調査結果においては、「大切にすべきであると思う」の割合が9割台となっている。

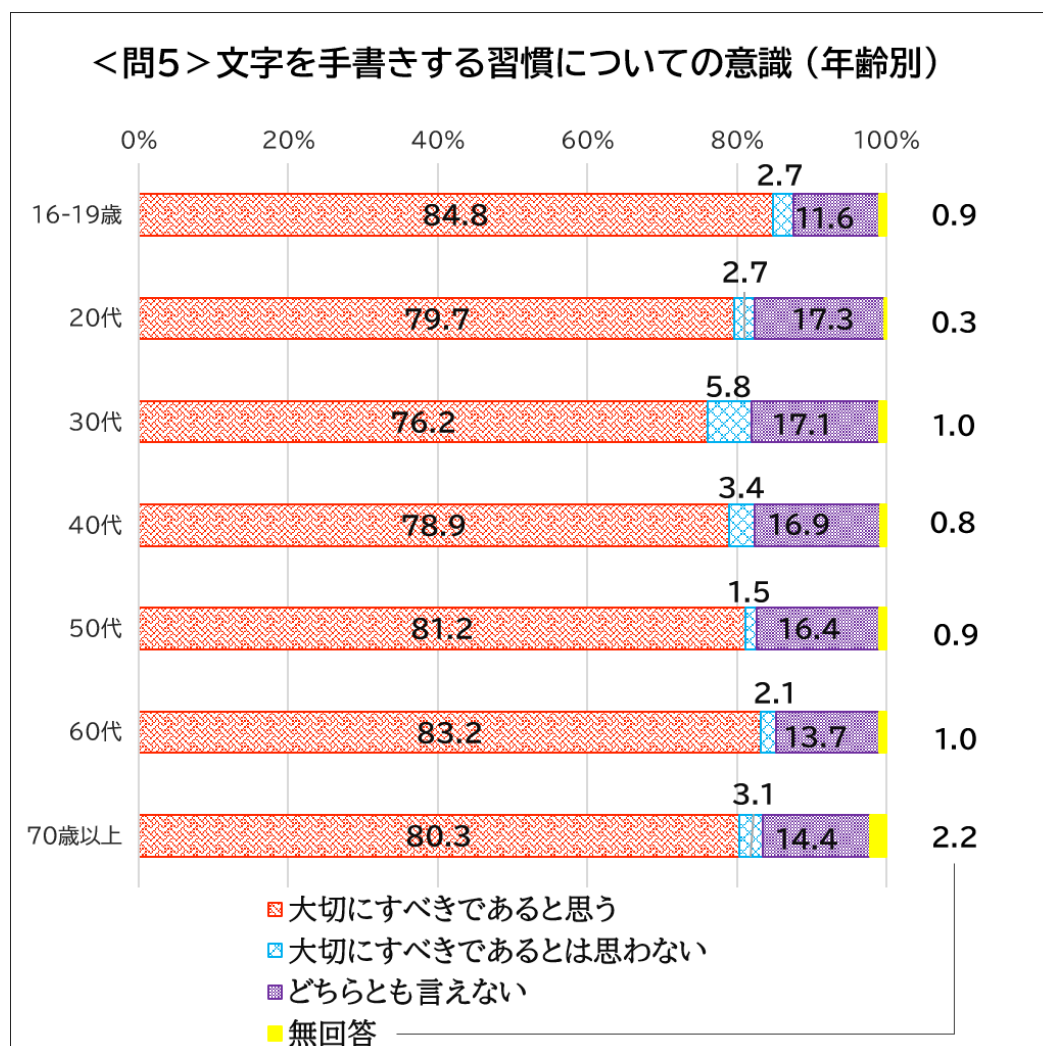


* 調査方法の変更のため、令和元(2019)年度以前の調査結果は参考値となり、比較には注意が必要。

〔 問5：年齢別の結果 〕

年齢別に見ると、次のグラフのとおり。

「大切にすべきであると思う」を選択した人の割合は、20～40代で7割台後半、16～19歳と50代以上で8割台前半となっている。



<問5付問1> 大切にすべきであると思う理由 (* p.17)

— 「文字を手書きすることは、漢字などを正確に身に付けることにつながるから」が約7割—

〔問5付問1：質問〕

（問5で「大切にすべきであると思う」と答えた人（全体の80.4%）に対して）
文字を手書きする習慣を大切にすべきであると思うのはなぜですか。（幾つでも回答）

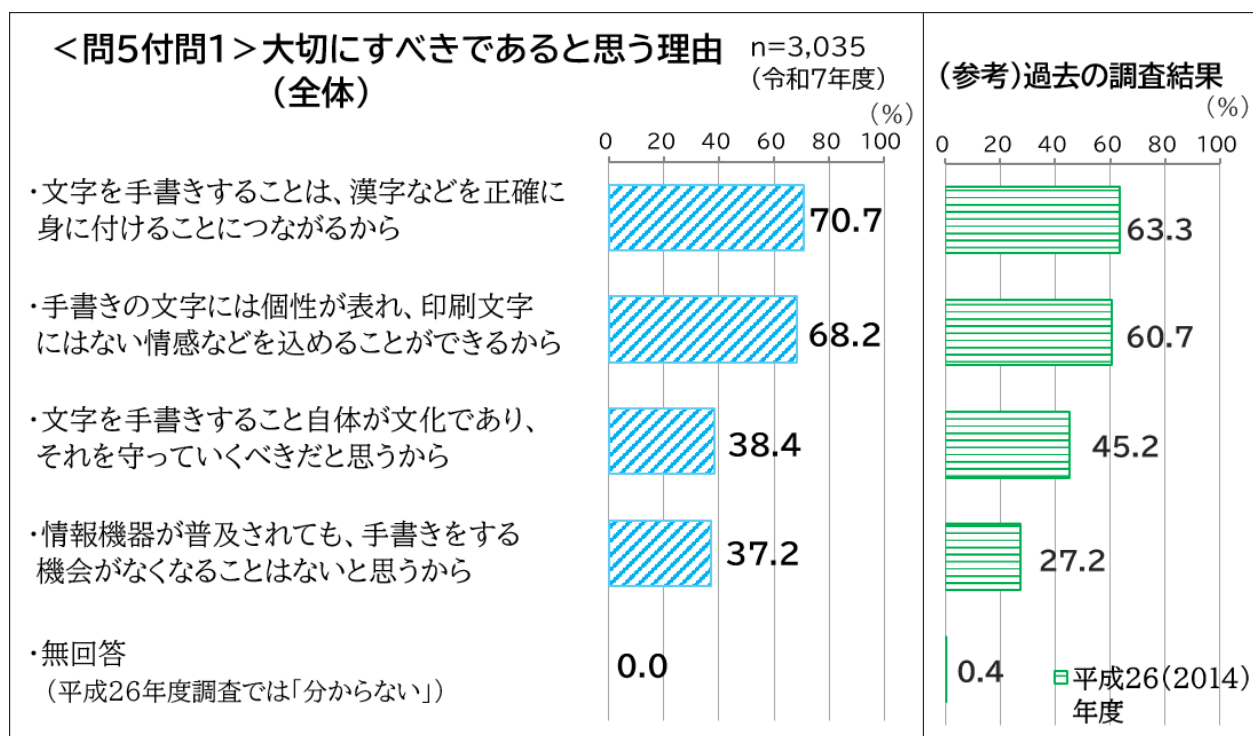
〔問5付問1：全体の結果・（参考）過去の調査結果〕

結果は次のグラフのとおり。（選択肢はグラフに示している。）

「文字を手書きすることは、漢字などを正確に身に付けることにつながるから」を選択した人の割合が70.7%で最も高く、次いで「手書きの文字には個性が表れ、印刷文字にはない情感などを込めることができるから」（68.2%）、「文字を手書きすること自体が文化であり、それを守っていくべきだと思うから」（38.4%）、「情報機器が普及されても、手書きをする機会がなくなることはないと思うから」（37.2%）となっている。

また、調査方法が変わったため、令和元（2019）年度以前の調査結果については、今回（令和7年度）の調査結果との比較に注意が必要だが、過去の調査結果（平成26年度）も参考値として下のグラフに示す。

過去調査においては、「文字を手書きすること自体が文化であり、それを守っていくべきだと思うから」と「情報機器が普及されても、手書きをする機会がなくなることはないと思うから」を選択した人の割合の差が18ポイントあったが、今回調査では、その差がほとんどなくなっている。



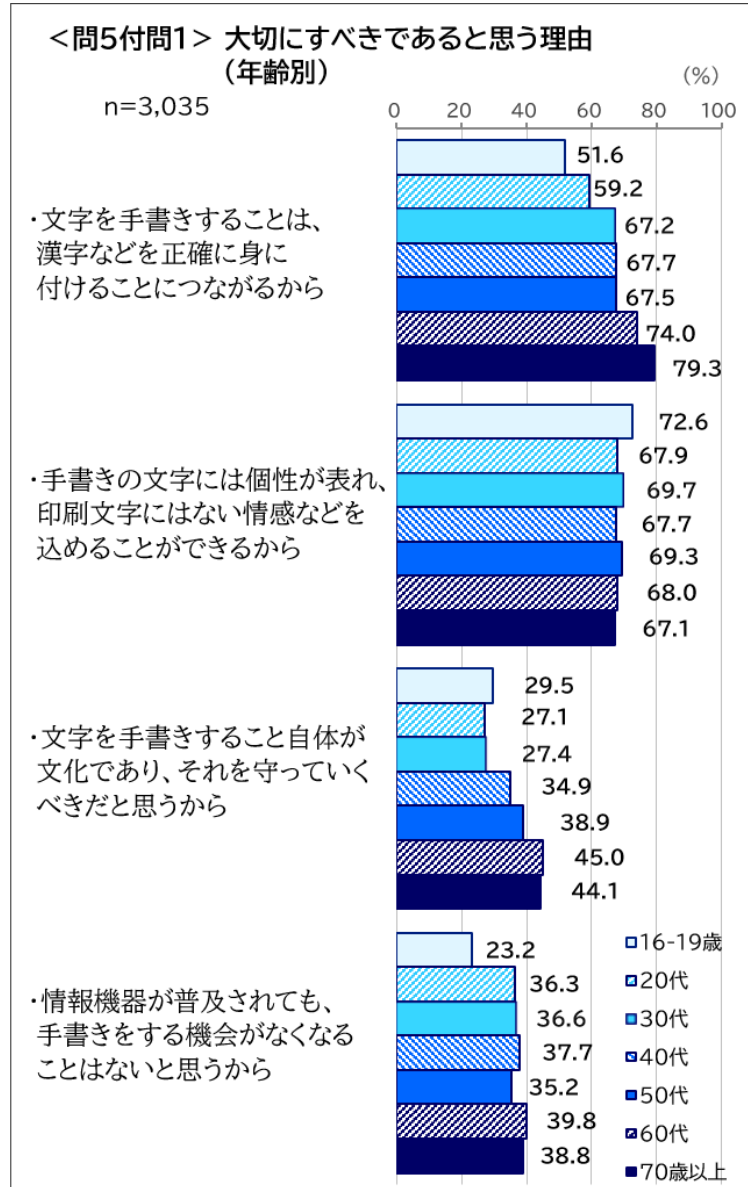
* 調査方法の変更のため、令和元（2019）年度以前の調査結果は参考値となり、比較には注意が必要。

〔 問5 付問1：年齢別の結果 〕

年齢別に見ると、次のグラフのとおり。

「文字を手書きすることは、漢字などを正確に身に付けることにつながるから」を選択した人の割合は、16～19 歳（51.6％）から 70 歳以上（79.3％）に掛けて、年齢が上がるほど高くなる傾向がある。

「文字を手書きすること自体が文化であり、それを守っていくべきだと思うから」は、60 代以上で4割台半ばと、他の年齢層より高くなっている。



<問6> 日常生活において、縦書きで文字を読んだり書いたりする頻度 (* p.20)

— 「ある(計)」が6割台後半 —

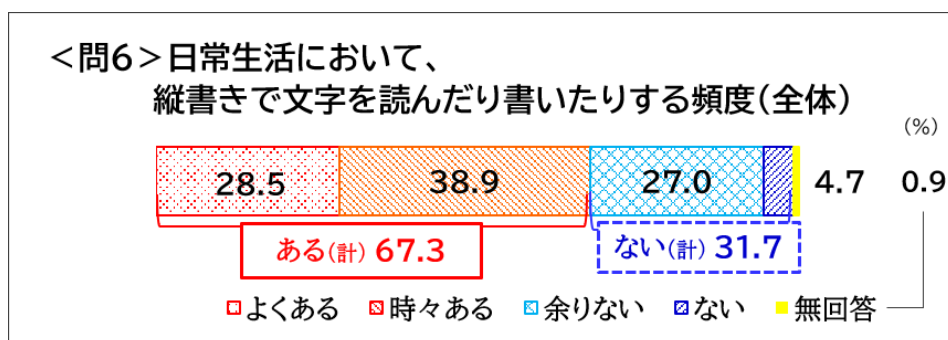
〔問6：質問〕

あなたには、日常生活において、縦書きで文字を読んだり書いたりする機会がありますか。それとも、ありませんか。 (一つ回答)

〔問6：全体の結果〕

結果は、次のグラフのとおり。(選択肢はグラフに示している。)

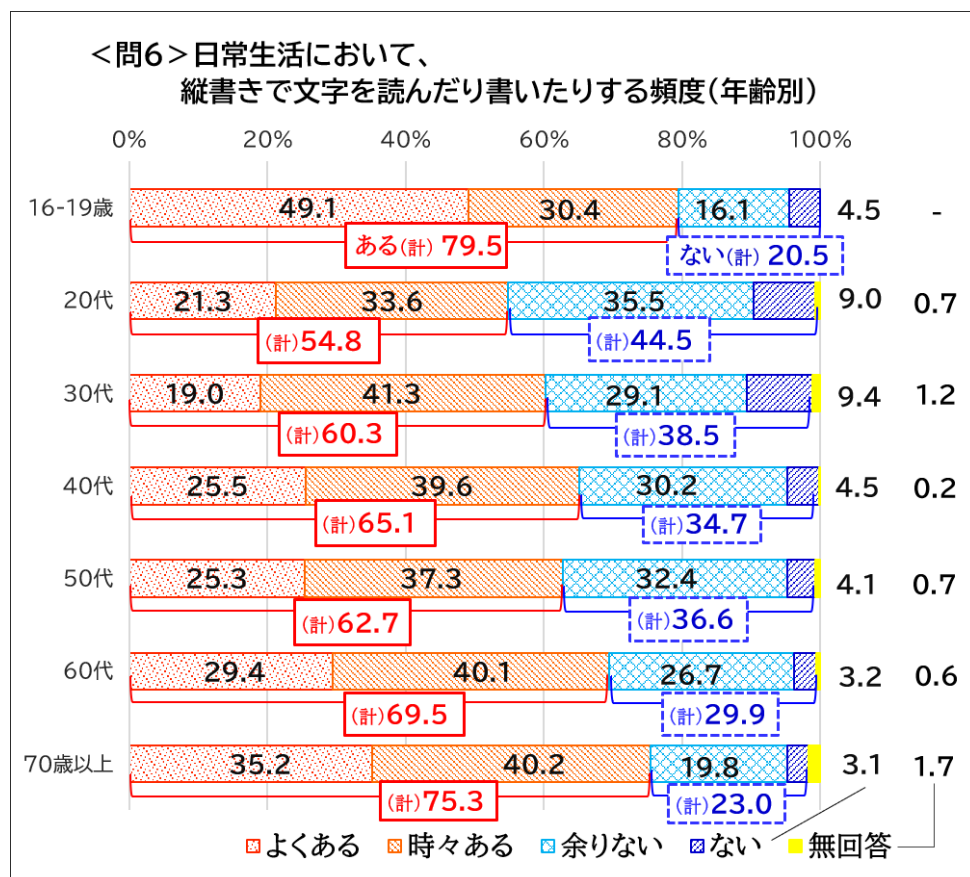
「よくある」(28.5%)と「時々ある」(38.9%)を合わせた「ある(計)」は67.3%となっている。一方、「ない」(4.7%)と「余りない」(27.0%)を合わせた「ない(計)」は31.7%となっている。



〔問6：年齢別の結果〕

年齢別に見ると、次のグラフのとおり。

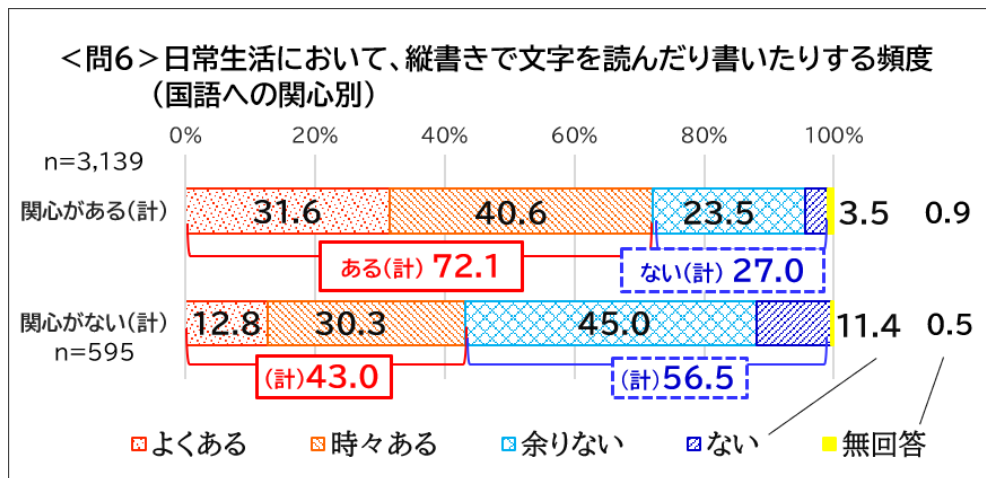
「ある(計)」を選択した人の割合は、16～19歳で8割弱、70歳以上で7割台半ばと、他の年齢層より高くなっている。



〔 問6：「国語への関心」別の結果 〕

問1「国語への関心」別に見ると、次のグラフのとおり。

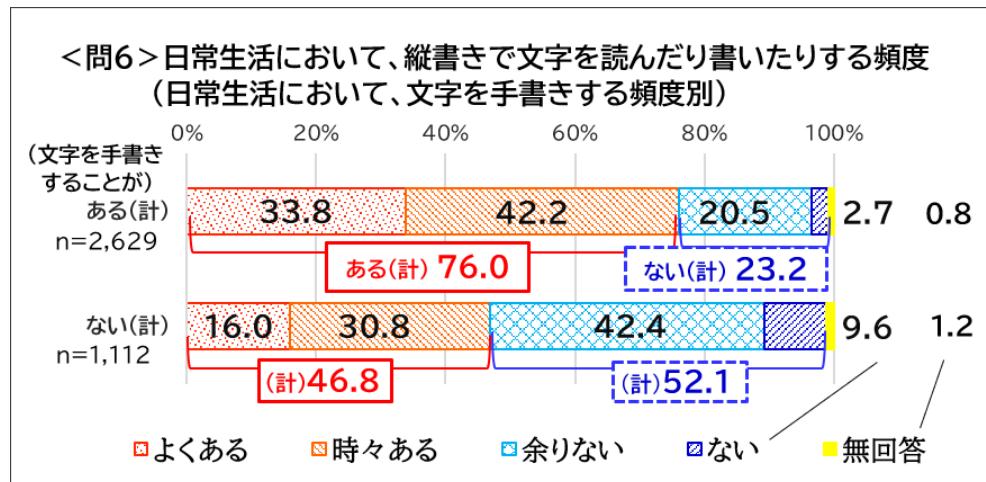
「ある(計)」を選択した人の割合は、国語への「関心がある(計)」と答えた人(72.1%)の方が「関心がない(計)」と答えた人(43.0%)より高くなっている。



〔 問6：「日常生活において、文字を手書きする頻度」別の結果 〕

問3「日常生活において、文字を手書きする頻度」別に見ると、次のグラフのとおり。

「ある(計)」を選択した人の割合は、文字を手書きすることが「ある(計)」と答えた人(76.0%)の方が「ない(計)」と答えた人(46.8%)より高くなっている。



<問6付問> 縦書きで文字を読んだり書いたりするところ (* p.22)

— 「紙の本・辞書」が約7割と最も高い —

〔問6付問：質問〕

(問6で「よくある」「時々ある」と答えた人(全体の67.3%)に対して)

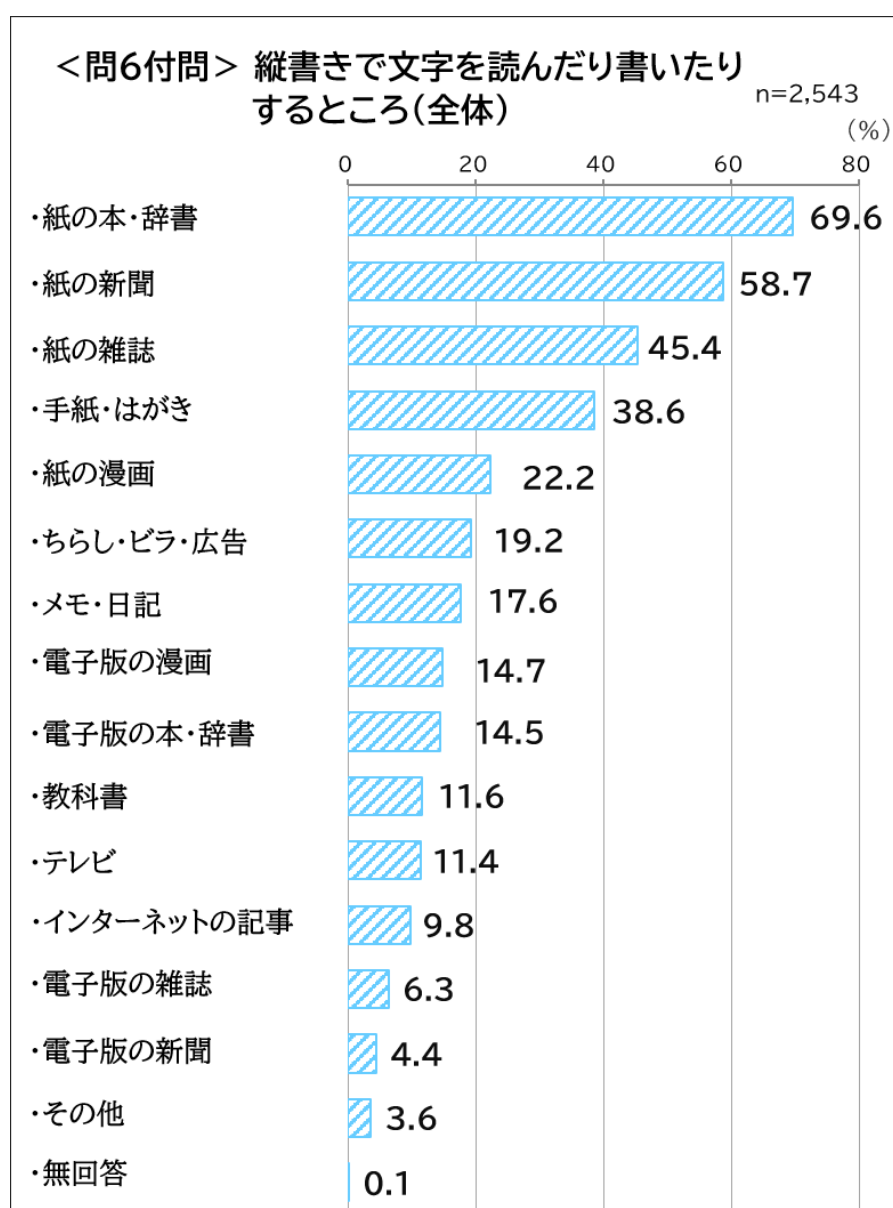
では、主にどのようなところで、縦書きで文字を読んだり書いたりする機会がありますか。

(幾つでも回答)

〔問6付問：全体の結果〕

結果は次のグラフのとおり。(選択肢はグラフに示している。)

「紙の本・辞書」を選択した人の割合が最も高く69.6%となっている。続いて、「紙の新聞」(58.7%)、「紙の雑誌」(45.4%)、「手紙・はがき」(38.6%)となっている。



〔 問6 付問：年齢別の結果 〕

年齢別に見ると、次のグラフのとおり。

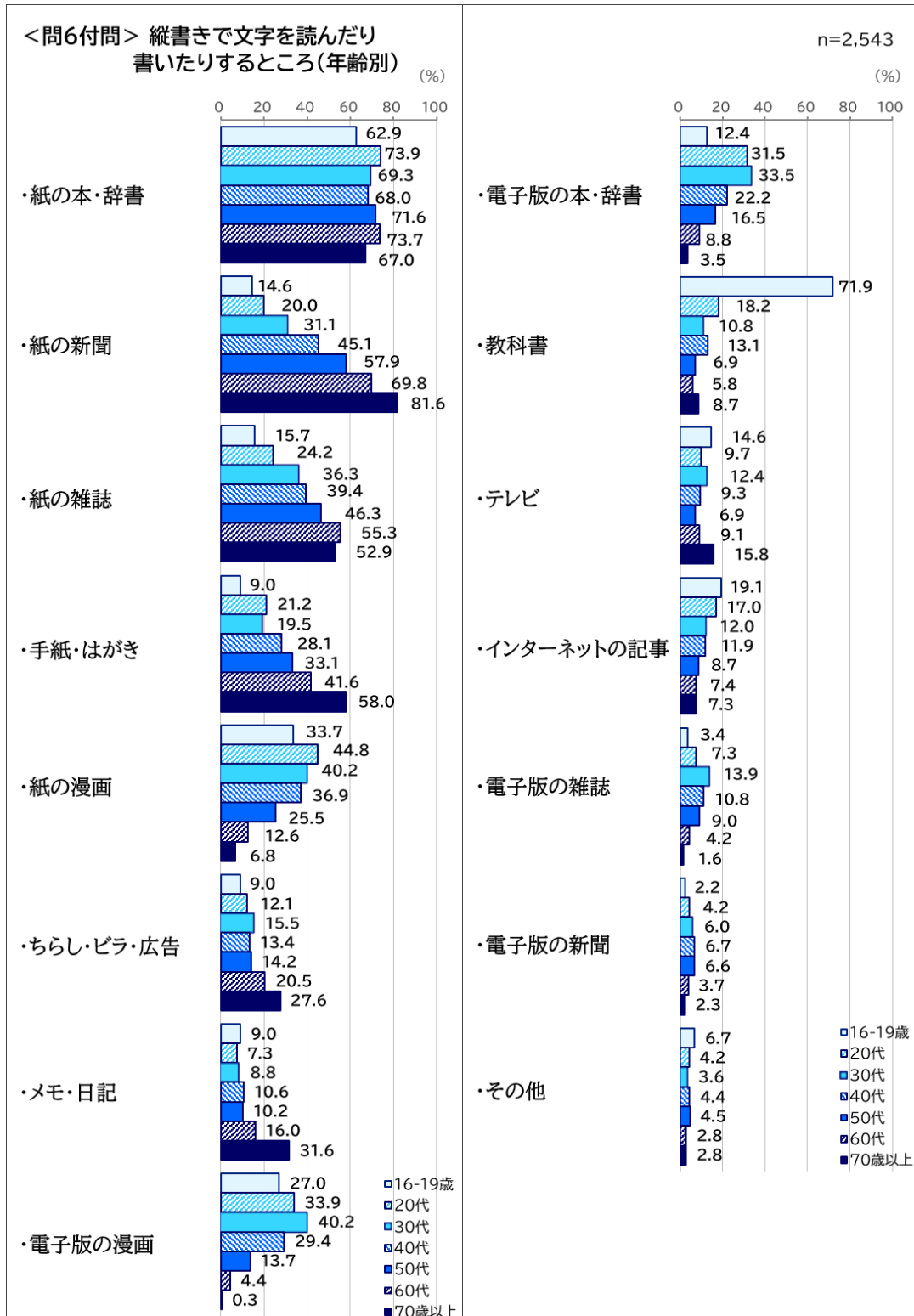
「紙の新聞」を選択した人の割合は、年齢が上がるに従って高くなり、70 歳以上で8割台と、他の年齢層より高くなっている。

「紙の雑誌」「手紙・はがき」は、年齢が上がるほど高くなる傾向があり、「紙の雑誌」は60 代以上で、「手紙・はがき」は70 歳以上で、それぞれ5割台と、他の年齢層より高くなっている。

「紙の漫画」「電子版の漫画」は、40 代以下で他の年齢層より高くなっている。

「ちらし・ビラ・広告」「メモ・日記」は、いずれも60 代以上で他の年齢層より高くなっている。

「教科書」は、16～19 歳で7割台と、他の年齢層より高くなっている。



＜問7＞縦書きで文字を読んだり書いたりする習慣についての意識 （＊ p.25）

— 「大切にすべきであると思う」が5割台後半 —

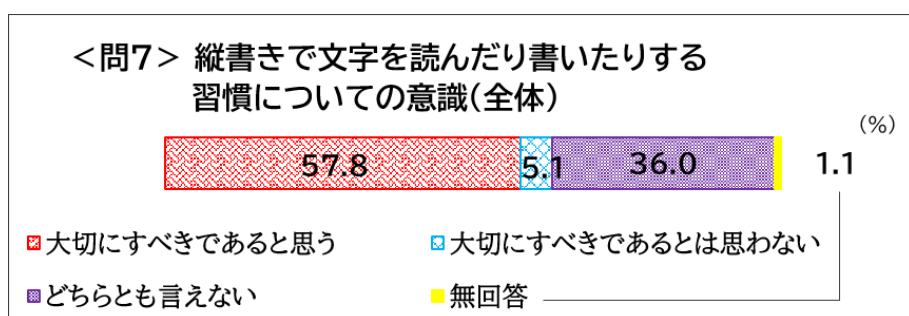
〔問7：質問〕

縦書きで文字を読んだり書いたりする習慣は、これからの時代においても大切にすべきであると思いますか、それともそうは思いませんか。（一つ回答）

〔問7：全体の結果〕

結果は、次のグラフのとおり。（選択肢はグラフに示している。）

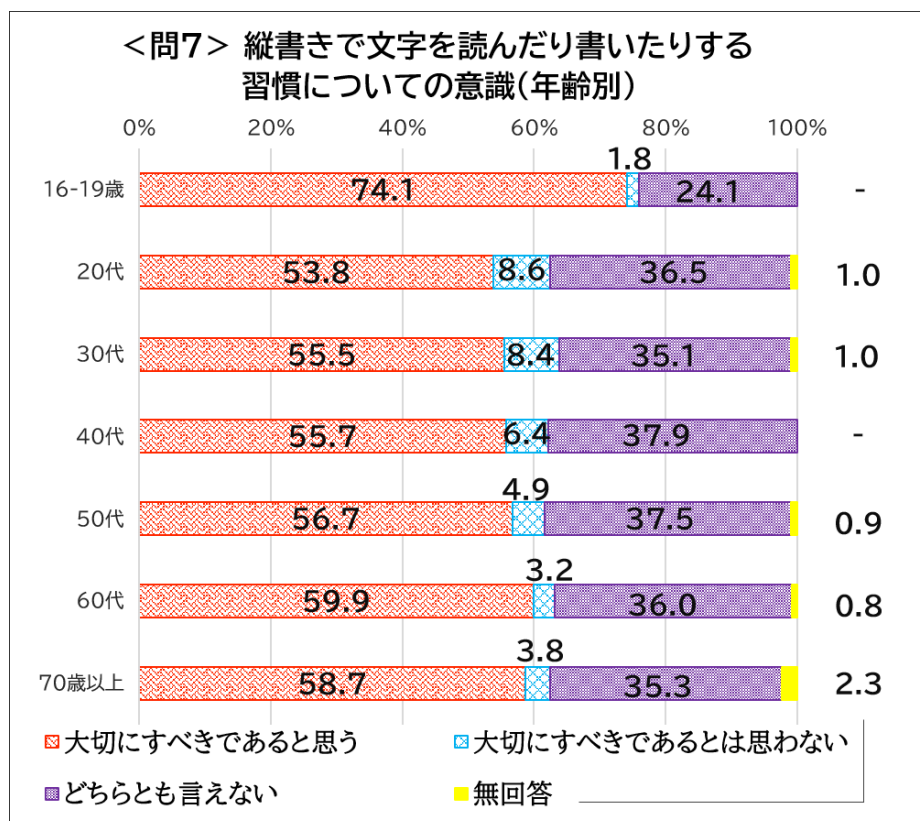
「大切にすべきであると思う」を選択した人の割合が 57.8%となっている。一方、「大切にすべきであるとは思わない」が5.1%、「どちらとも言えない」が36.0%となっている。



〔問7：年齢別の結果〕

年齢別に見ると、次のグラフのとおり。

「大切にすべきであると思う」を選択した人の割合は、16～19歳で74.1%と、他の年齢層より高くなっている。



Ⅱ 方言に関する意識

<問8> 共通語と方言についての考え方 (* p.27)

— 「相手や場面によって共通語と方言を使い分ければよい」が8割台—

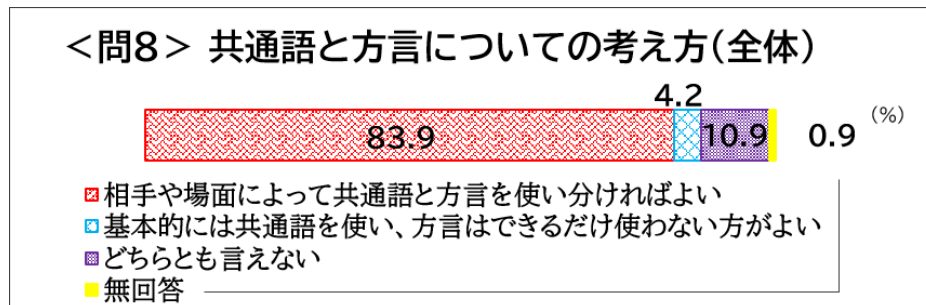
〔問8：質問〕

共通語と方言について、あなたのお考えはどちらに近いですか。 (一つ回答)

〔問8：全体の結果〕

結果は次のグラフのとおり。(選択肢はグラフに示している。)

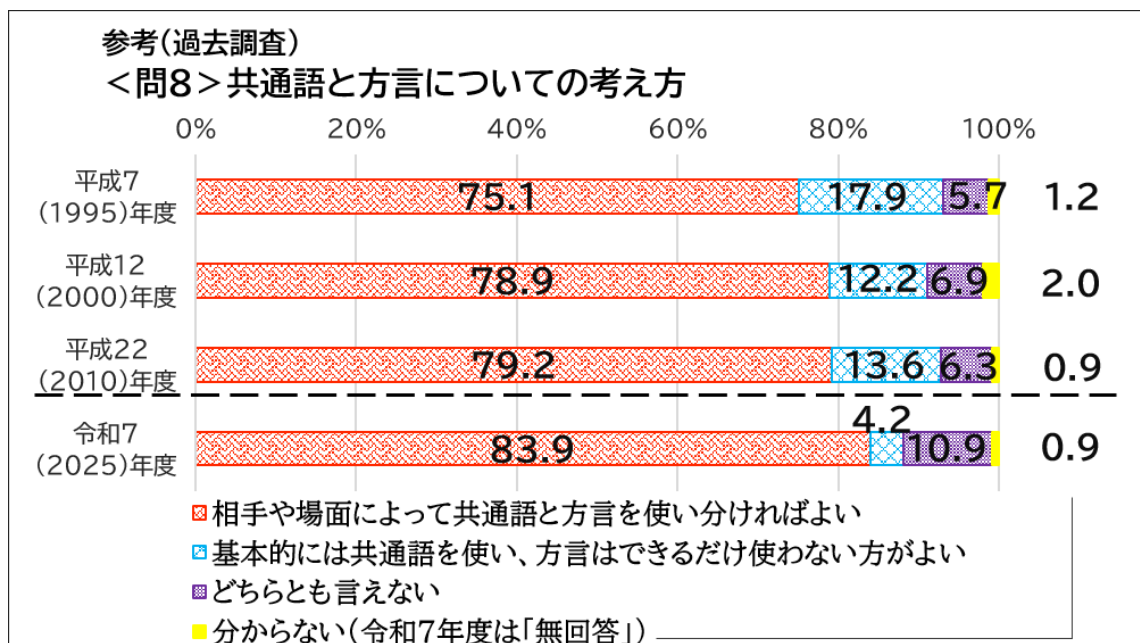
「相手や場面によって共通語と方言を使い分ければよい」を選択した人の割合が83.9%、「基本的には共通語を使い、方言はできるだけ使わない方がよい」が4.2%となっている。「どちらとも言えない」が10.9%となっている。



〔(参考) 問8：過去の調査結果〕

調査方法が変わったため、令和元(2019)年度以前の調査結果については、今回(令和7年度)の調査結果との比較に注意が必要だが、過去の調査結果(平成7、12、22年度)を参考値として下のグラフに示す。

過去の調査結果においては、「相手や場面によって共通語と方言を使い分ければよい」の割合が増加傾向にあった。



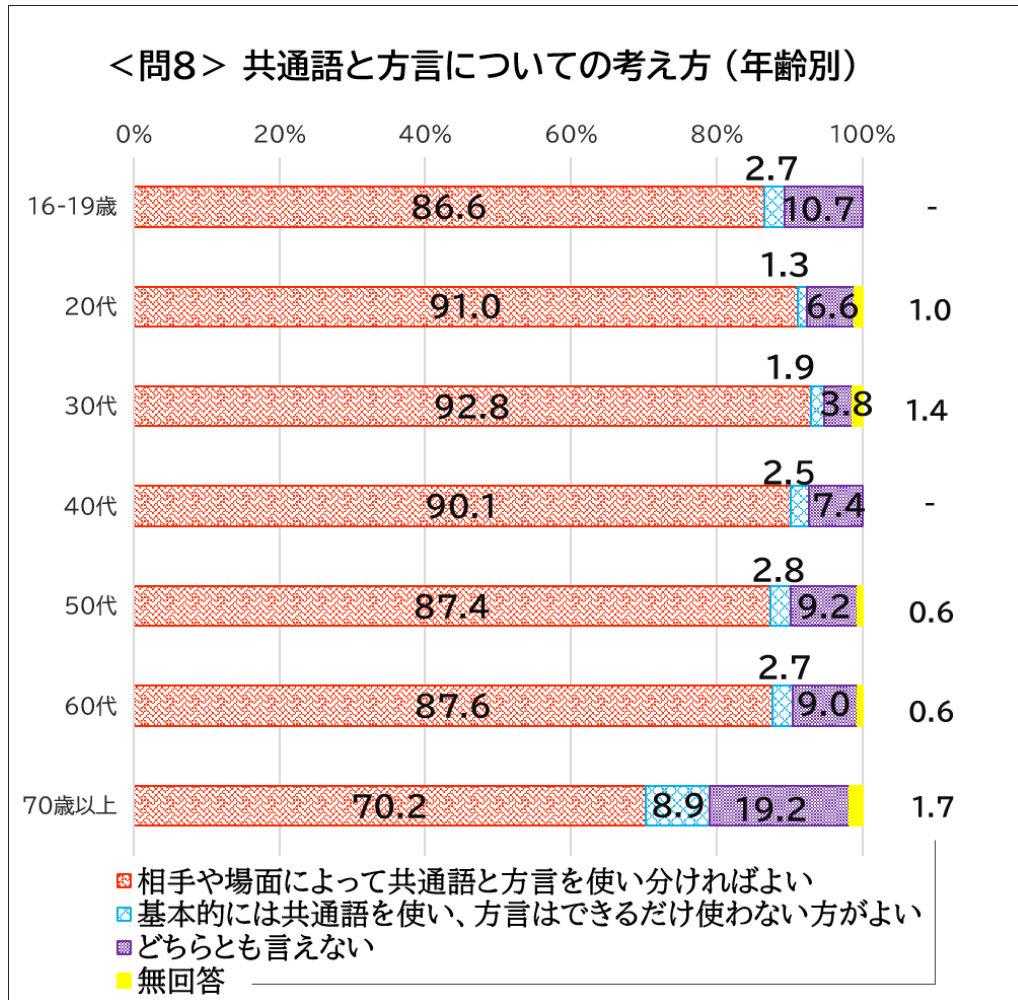
* 調査方法の変更のため、令和元(2019)年度以前の調査結果は参考値となり、比較には注意が必要。

〔 問8：年齢別の結果 〕

年齢別に見ると、次のグラフのとおり。

「相手や場面によって共通語と方言を使い分ければよい」を選択した人の割合は、20～40代で9割台前半と、他の年齢層より高くなっている。

「基本的には共通語を使い、方言はできるだけ使わない方がよい」「どちらとも言えない」は、70歳以上で他の年齢層より高くなっている。



<問9> 日本国内で消滅の危機にある言語や方言についての考え方 (* p. 29)

— 「そのような言語や方言が消滅しないような対策が必要である」が約5割 —

〔問9：質問〕

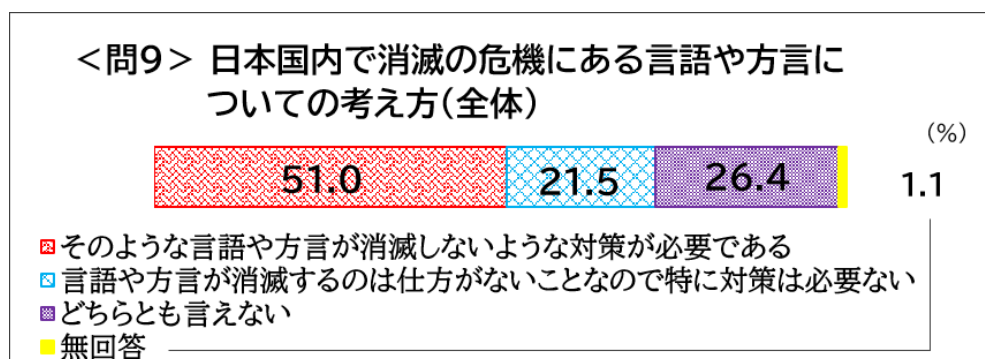
先住民族の言語をはじめ、海外でも国内でも言語や方言が消滅の危機にあると言われています。現在、言語の多様性を維持することを重視する考え方が国連等で示されるようになってきています。

国内で消滅の危機にある言語や方言について、あなたはどのように考えますか。この中からあなたの考え方に最も近いものを一つ選んでください。（一つ回答）

〔問9：全体の結果〕

結果は次のグラフのとおり。（選択肢はグラフに示している。）

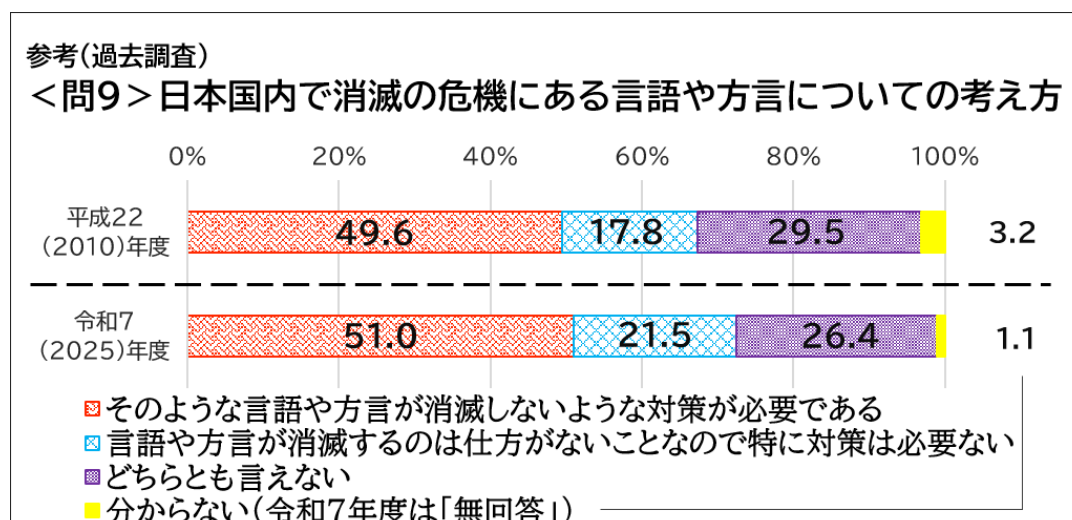
「そのような言語や方言が消滅しないような対策が必要である」を選択した人の割合が51.0%となっている。一方、「言語や方言が消滅するのは仕方がないことなので特に対策は必要ない」が21.5%、「どちらとも言えない」が26.4%となっている。



〔（参考）問9：過去の調査結果〕

平成22年度調査でも、ほぼ同内容の問いを尋ねている。参考値として下のグラフに示す。

また、調査方法が変わったため、令和元（2019）年度以前の調査結果については、今回（令和7年度）の調査結果との比較に注意が必要である。



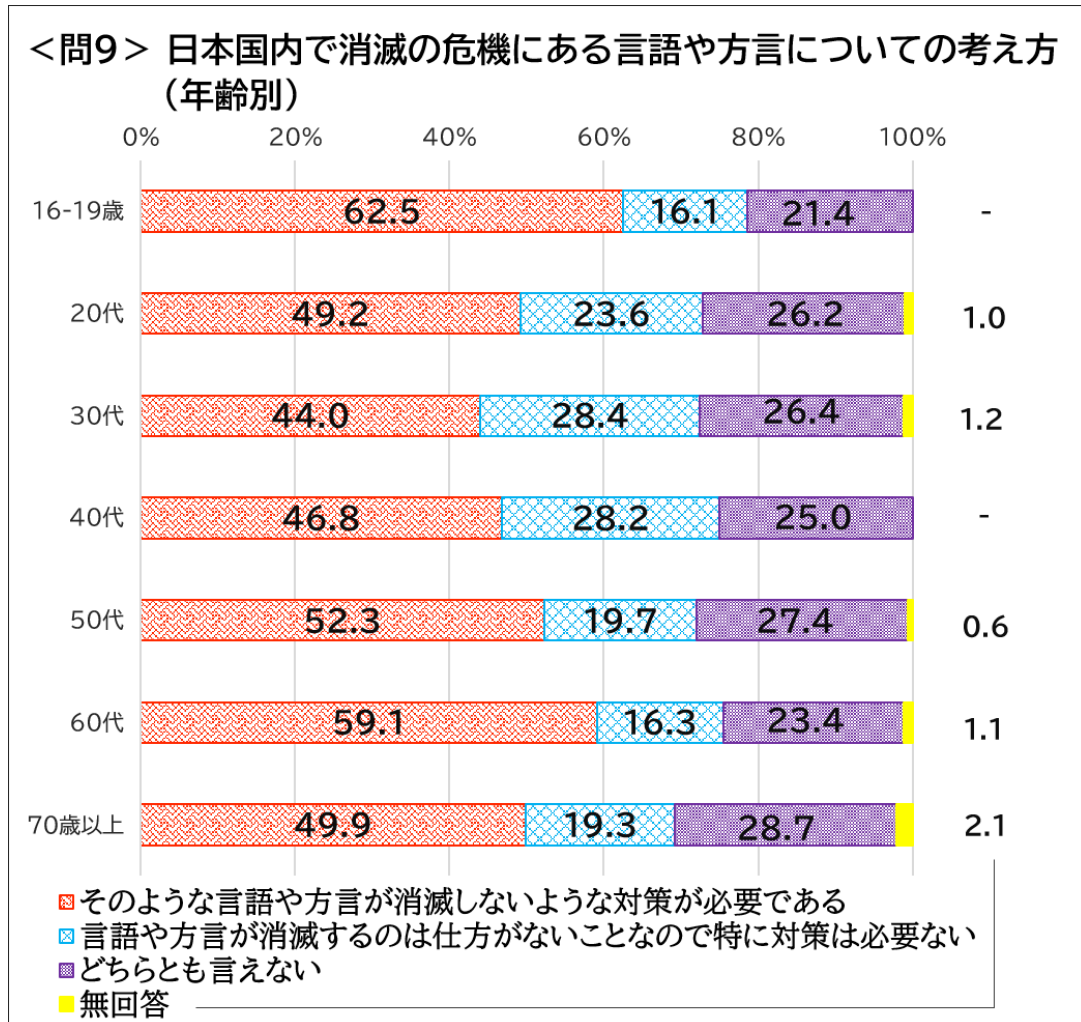
* 調査方法の変更のため、令和元（2019）年度以前の調査結果は参考値となり、比較には注意が必要。

〔 問9：年齢別の結果 〕

年齢別に見ると、次のグラフのとおり。

「そのような言語や方言が消滅しないような対策が必要である」を選択した人の割合は、16～19 歳と60 代で約6 割と、他の年齢層より高くなっている。

「言語や方言が消滅するのは仕方がないことなので特に対策は必要ない」は、30～40 代で3 割弱と、他の年齢層より高くなっている。



<問10> 方言を記録し、保存する取組についての考え方 （＊ p.32）

— 「日本全国の様々な地域の方言を、記録・保存するのが望ましい」が5割台と最も高い —

〔問10：質問〕

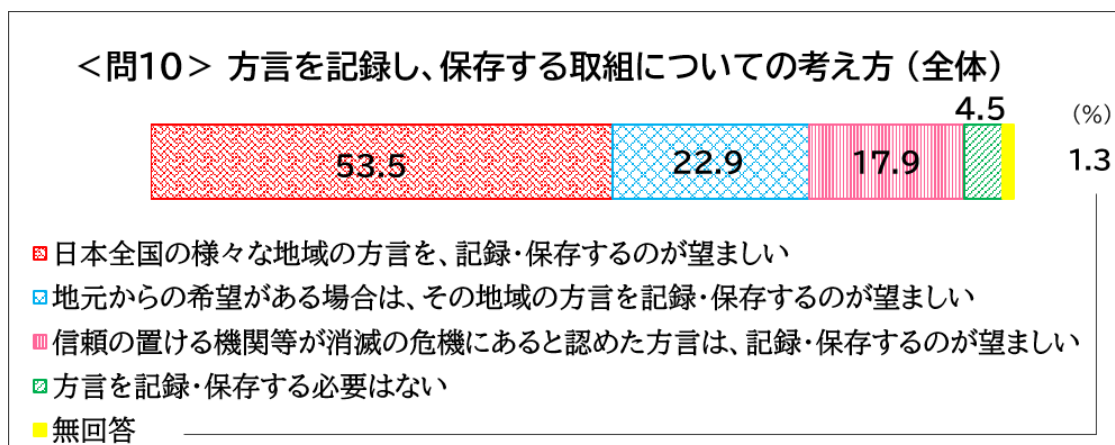
方言を記録し、保存しておくことにより、その方言を学びたいときなどにデータを活用することができます。

方言を記録し、保存する取組について、あなたはどのように考えますか。この中からあなたの考え方に最も近いものを一つ選んでください。（幾つでも回答）

〔問10：全体の結果〕

結果は、次のグラフのとおり。（選択肢はグラフに示している。）

「日本全国の様々な地域の方言を、記録・保存するのが望ましい」を選択した人の割合が最も高く、53.5%となっている。続いて、「地元からの希望がある場合は、その地域の方言を記録・保存するのが望ましい」（22.9%）、「信頼の置ける機関等が消滅の危機にあると認めた方言は、記録・保存するのが望ましい」（17.9%）、「方言を記録・保存する必要はない」（4.5%）となっている。



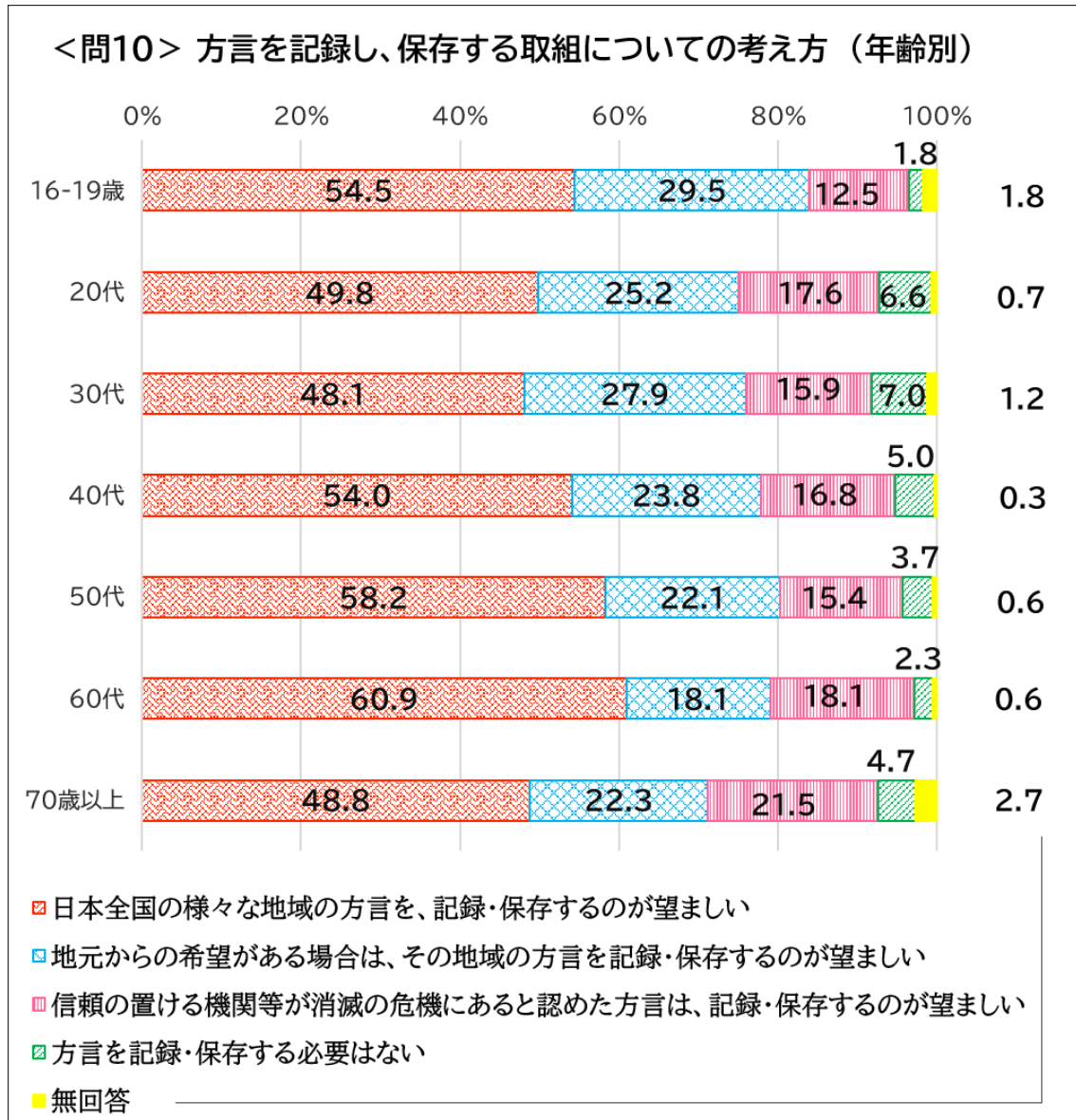
〔 問 10：年齢別の結果 〕

年齢別に見ると、次のグラフのとおり。

「日本全国の様々な地域の方言を、記録・保存するのが望ましい」を選択した人の割合は、50～60代で約6割と、他の年齢層より高くなっている。

「地元からの希望がある場合は、その地域の方言を記録・保存するのが望ましい」は、30代以下で2割台後半と、他の年齢層より高くなっている。

「信頼の置ける機関等が消滅の危機にあると認めた方言は、記録・保存するのが望ましい」は、70歳以上で他の年齢層より高くなっている。



Ⅲ 敬語に関する意識

<問11> これからの敬語の在り方 (* p. 35)

— 「敬語は伝統的な美しい日本語として、豊かな表現が大切にされるべきだ」が5割台半ば —

〔問11：質問〕

あなたは、これからの時代の敬語はどうあるべきだと思いますか。あなたの考えが(a)と(b)のどちらに近いかを教えてください。（一つ回答）

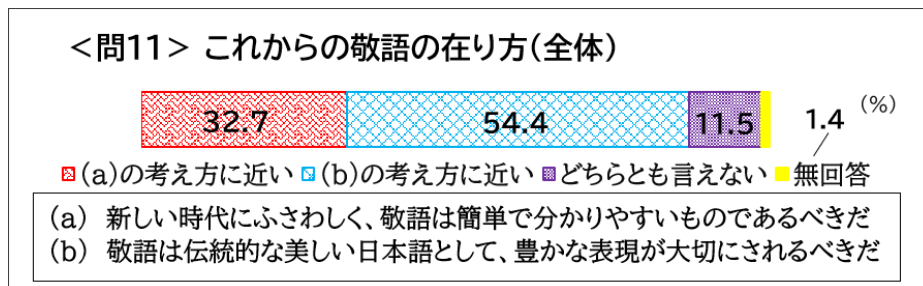
(a) 新しい時代にふさわしく、敬語は簡単で分かりやすいものであるべきだ

(b) 敬語は伝統的な美しい日本語として、豊かな表現が大切にされるべきだ

〔問11：全体の結果〕

結果は、次のグラフのとおり。（選択肢はグラフに示している。）

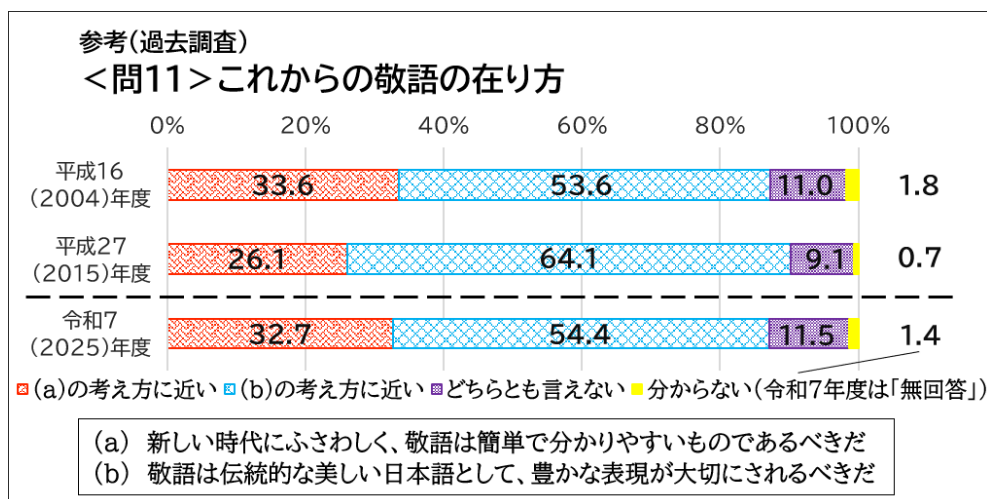
「(b) の考え方（敬語は伝統的な美しい日本語として、豊かな表現が大切にされるべきだ）に近い」を選択した人の割合が54.4%となっている。一方、「(a) の考え方（新しい時代にふさわしく、敬語は簡単で分かりやすいものであるべきだ）に近い」が32.7%、「どちらとも言えない」が11.5%となっている。



〔（参考）問11：過去の調査結果〕

調査方法が変わったため、令和元（2019）年度以前の調査結果については、今回（令和7年度）の調査結果との比較に注意が必要だが、過去の調査結果（平成16、27年度）を参考値として下のグラフに示す。

過去の調査結果においては、「(b) の考え方（敬語は伝統的な美しい日本語として、豊かな表現が大切にされるべきだ）に近い」の割合が増加傾向にあった。

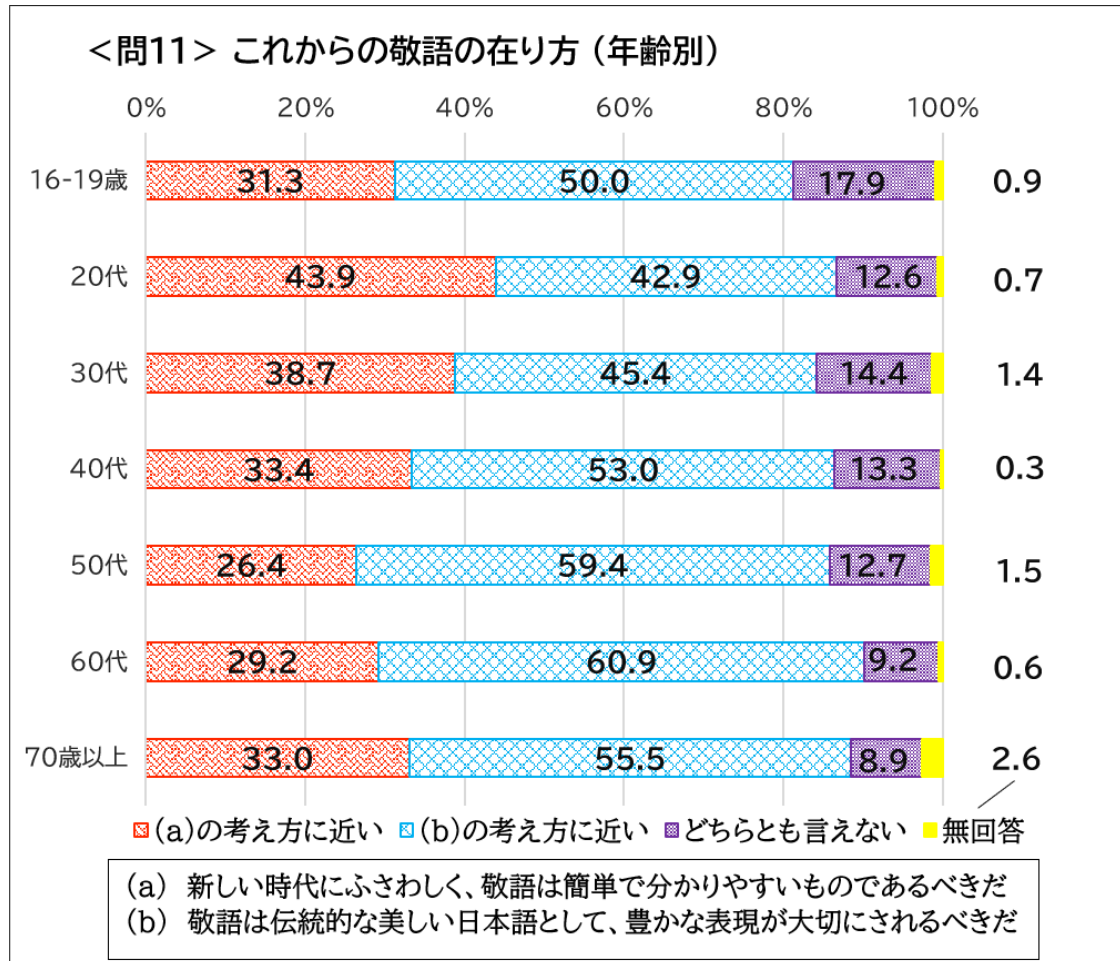


* 調査方法の変更のため、令和元（2019）年度以前の調査結果は参考値となり、比較には注意が必要。

〔 問 11：年齢別の結果 〕

年齢別に見ると、次のグラフのとおり。

「敬語は伝統的な美しい日本語として、豊かな表現が大切にされるべきだという考え方に近い」を選択した人の割合は、50～60代で約6割と、他の年齢層より高くなっている。「新しい時代にふさわしく、敬語は簡単で分かりやすいものであるべきだという考え方に近い」は、20～30代で他の年齢層より高くなっている。



<問 12> 望ましい呼び方（課長に部下が呼び掛けるとき） （＊ p. 38）

— 「課長」が望ましいと思う人が6割台 —

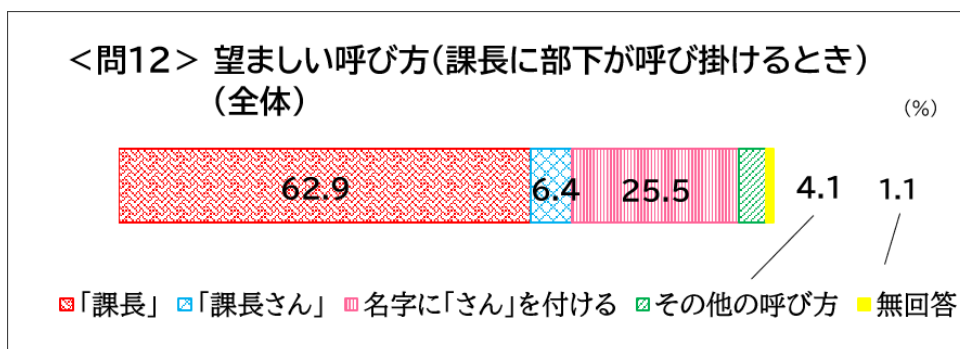
〔 問 12：質問 〕

会社の課長に部下が呼び掛けるとき、どの呼び方が一番望ましいと思いますか。 （一つ回答）

〔 問 12：全体の結果 〕

結果は、次のグラフのとおり。（選択肢はグラフに示している。）

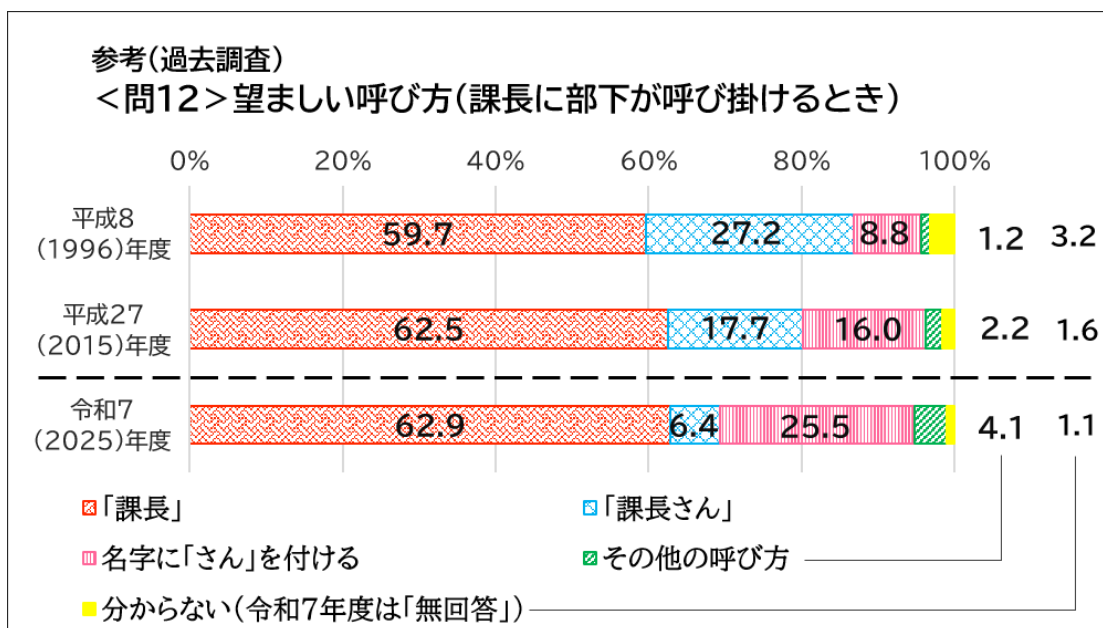
「課長」を選択した人の割合が最も高く、62.9%となっている。続いて、「名字に「さん」を付ける」が25.5%、「課長さん」が6.4%となっている。



〔（参考）問 12：過去の調査結果 〕

調査方法が変わったため、令和元（2019）年度以前の調査結果については、今回（令和7年度）の調査結果との比較に注意が必要だが、過去の調査結果（平成15、25年度）を参考値として下のグラフに示す。

過去の調査結果においては、「課長さん」の割合が減少していた。一方、「名字に「さん」を付ける」は増加していた。



* 調査方法の変更のため、令和元（2019）年度以前の調査結果は参考値となり、比較には注意が必要。

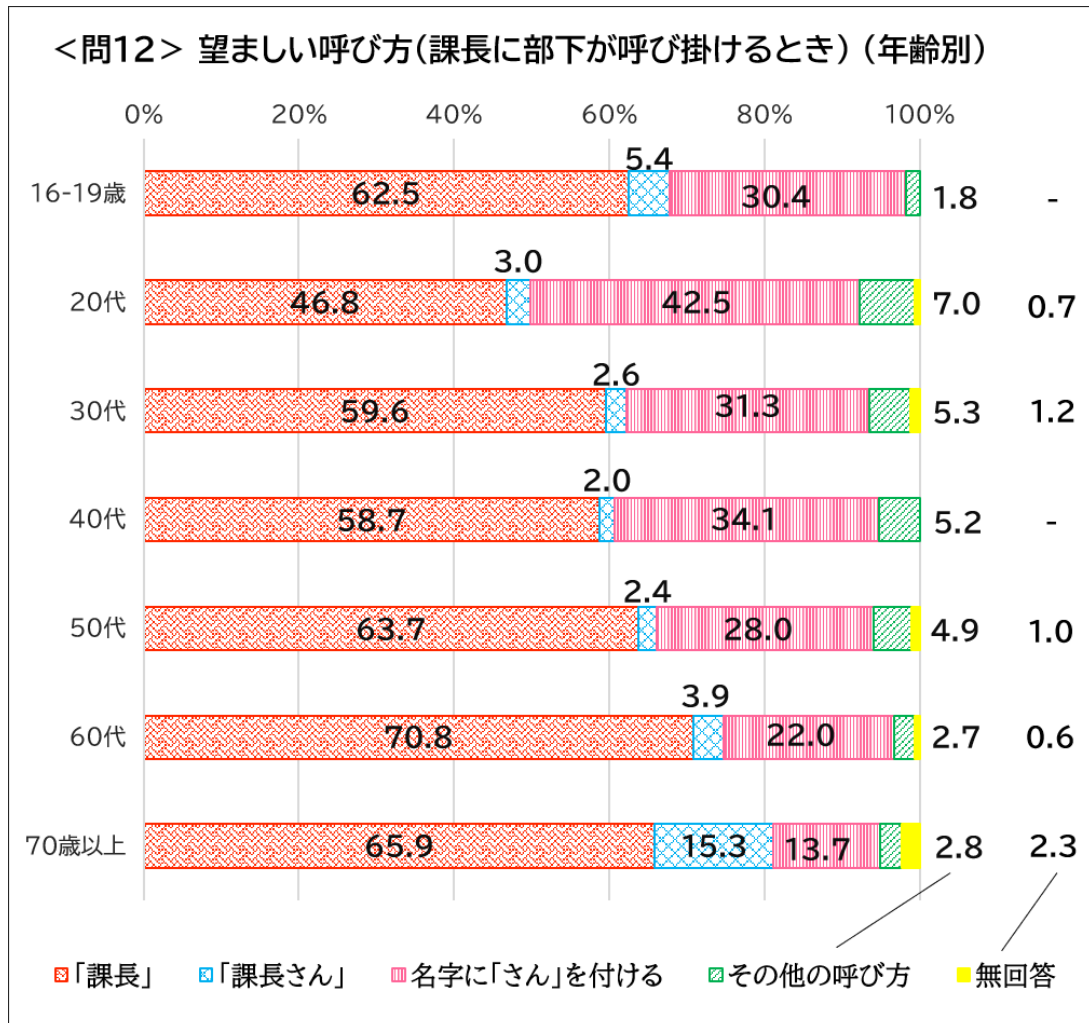
〔 問 12：年齢別の結果 〕

年齢別に見ると、次のグラフのとおり。

「課長」を選択した人の割合は、60代で約7割と、他の年齢層より高くなっている。

「名字に「さん」を付ける」は、20代で4割台と、他の年齢層より高くなっている。

「課長さん」は、70歳以上で他の年齢層より高くなっている。



<問 13～15> 外部の人への言い方（会社の受付の人、学校の先生、病院の医師）

（＊ p.40）

— それぞれ「鈴木は…」 「田中先生は…」 「木村先生は…」 が最も高くなっている—

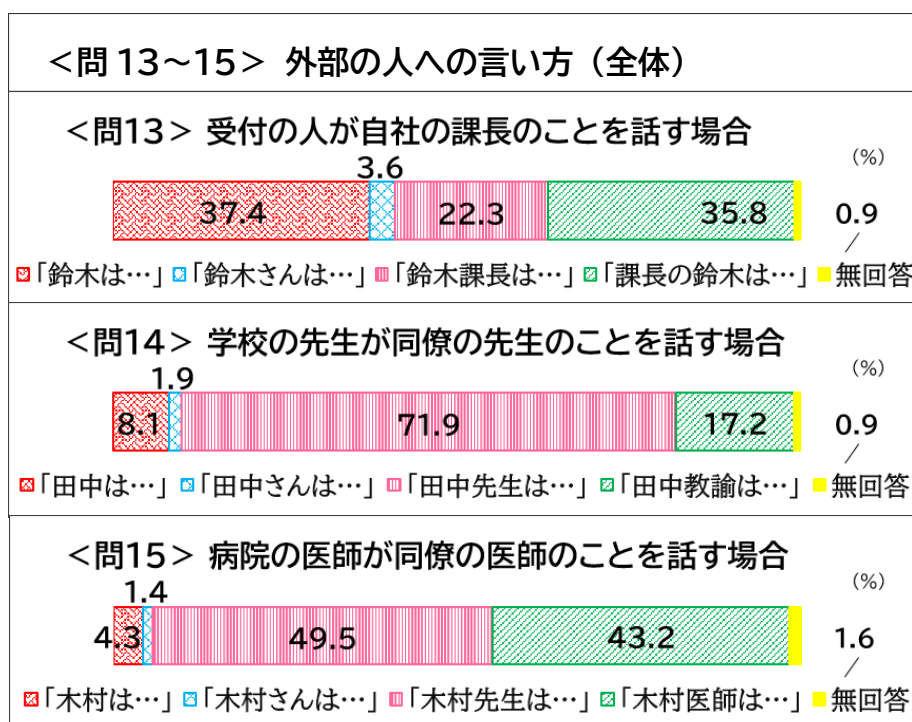
〔 問 13～15：質問 〕

- ・ 会社の受付の人が外部の人に、自分の会社の鈴木課長のことを話す場合、「鈴木は…」と言うのと「鈴木さんは…」と言うのと「鈴木課長は…」と言うのと「課長の鈴木は…」と言うのとでは、どれが一番良いと思いますか。（一つ回答）
- ・ 学校の先生が生徒の保護者に、同僚の田中先生のことを話す場合、「田中は…」と言うのと「田中さんは…」と言うのと「田中先生は…」と言うのと「田中教諭は…」と言うのとでは、どれが一番良いと思いますか。（一つ回答）
- ・ 病院の医師が大人の患者に、同僚の木村医師のことを話す場合、「木村は…」と言うのと「木村さんは…」と言うのと「木村先生は…」と言うのと「木村医師は…」言うのとでは、どれが一番良いと思いますか。（一つ回答）

〔 問 13～15：全体の結果 〕

結果は次のグラフのとおり。（選択肢はグラフに示している。）

- ・〔受付の人が自社の課長のことを話す場合〕「鈴木は…」を選択した人の割合が最も高く 37.4%となっている。次いで「課長の鈴木は…」が 35.8%、「鈴木課長は…」が 22.3%、「鈴木さんは…」が 3.6%となっている。
- ・〔学校の先生が同僚の先生のことを話す場合〕「田中先生は…」を選択した人の割合が最も高く 71.9%となっている。次いで「田中教諭は…」が 17.2%、「田中は…」が 8.1%、「田中さんは…」が 1.9%となっている。
- ・〔病院の医師が同僚の医師のことを話す場合〕「木村先生は…」を選択した人の割合が最も高く 49.5%となっている。次いで「木村医師は…」が 43.2%、「木村は…」が 4.3%、「木村さんは…」が 1.4%となっている。

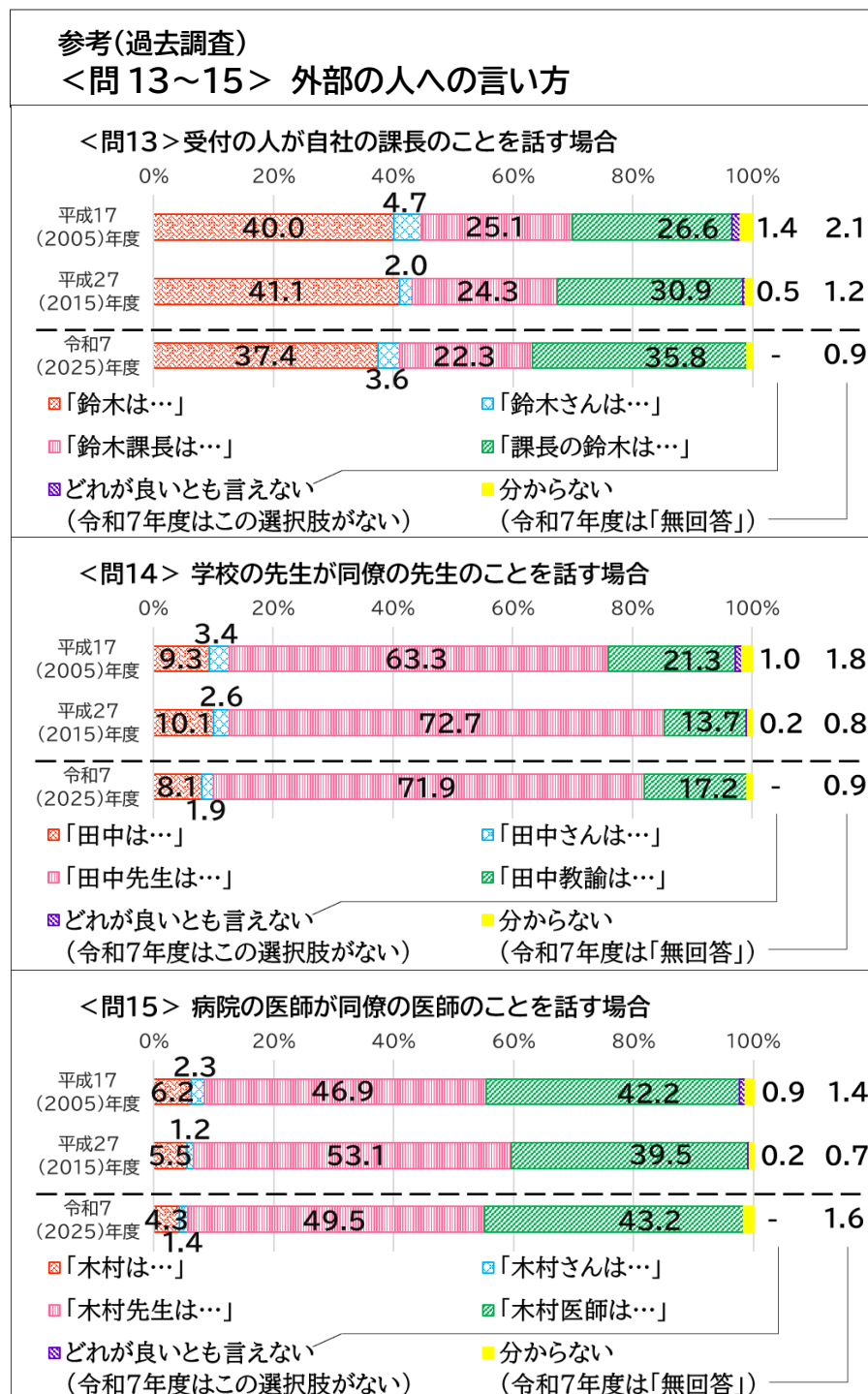


〔（参考）問 13～15：過去の調査結果〕

調査方法が変わったため、令和元（2019）年度以前の調査結果については、今回（令和7年度）の調査結果との比較に注意が必要だが、過去の調査結果（平成 17、27 年度）を参考値として下のグラフに示す。

過去の調査結果においては、以下のとおり。

- ・〔受付の人が自社の課長のことを話す場合〕「課長の鈴木は…」の割合が増加していた。
- ・〔学校の先生が同僚の先生のことを話す場合〕「田中先生は…」の割合が増加していた。
- ・〔病院の医師が同僚の医師のことを話す場合〕「木村先生は…」の割合が増加していた。

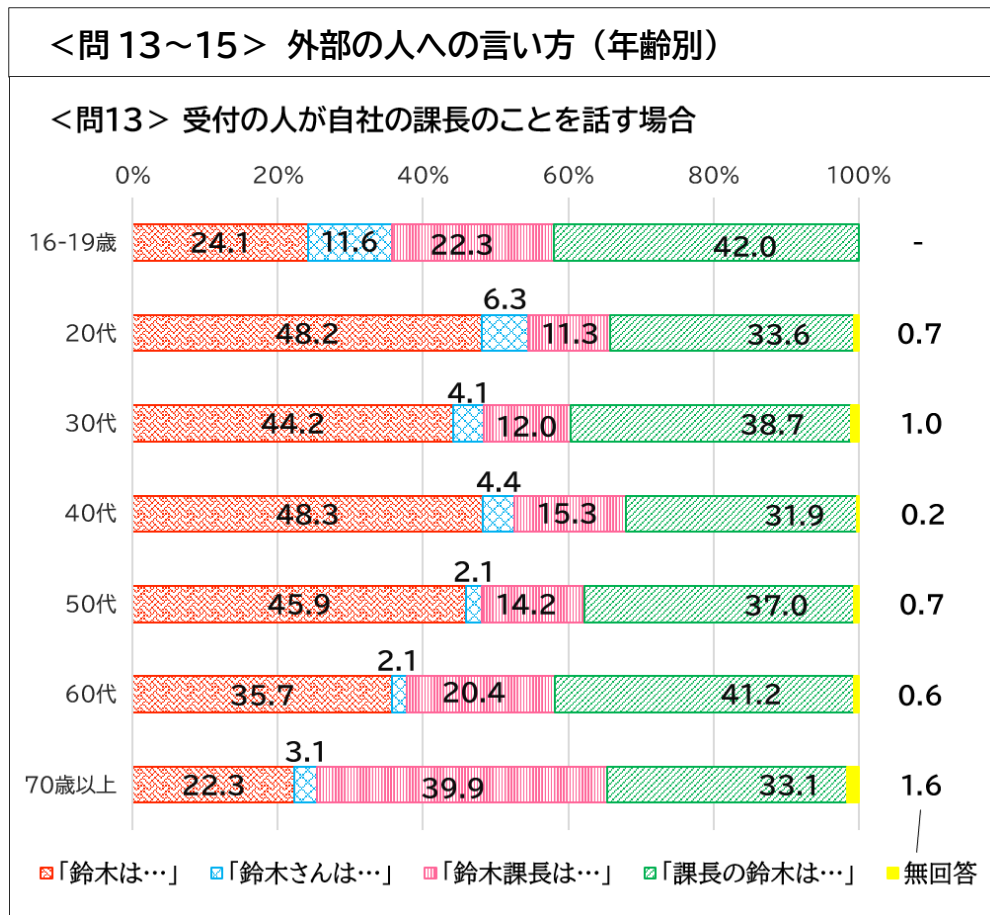


* 調査方法の変更のため、令和元（2019）年度以前の調査結果は参考値となり、比較には注意が必要。

〔 問 13～15：年齢別の結果 〕

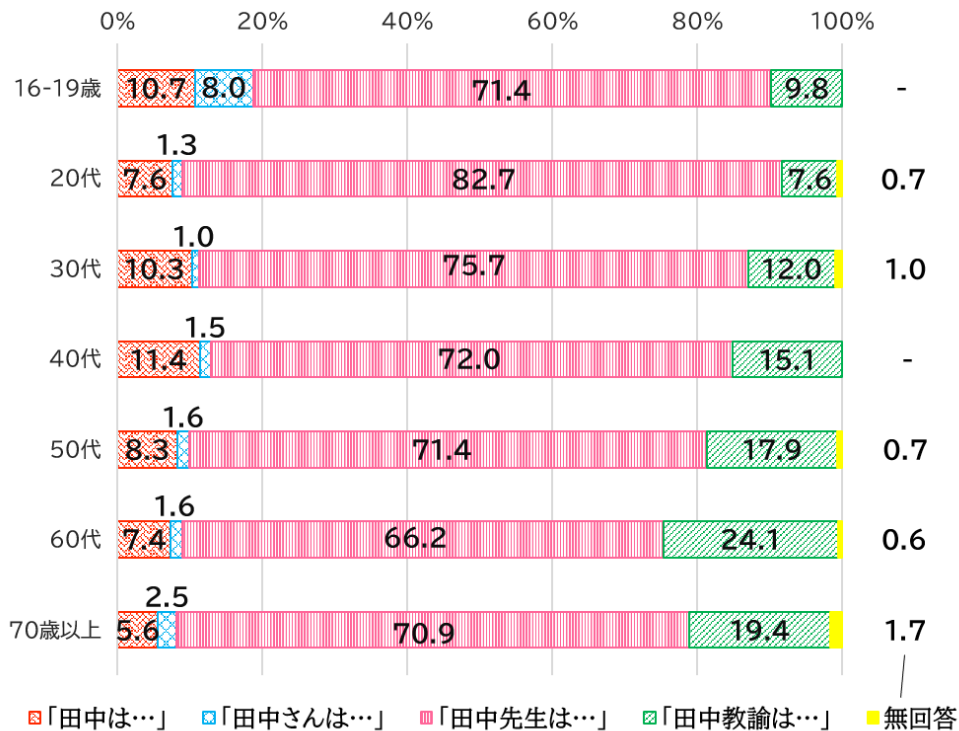
年齢別に見ると、次のグラフのとおり。

- ・〔受付の人が自社の課長のことを話す場合〕「鈴木は…」を選択した人の割合は20～50代で、「課長の鈴木は…」は16～19歳と60代で、それぞれ4割台と、他の年齢層より高くなっている。「鈴木課長は…」は70歳以上で、「鈴木さんは…」は16～19歳で、他の年齢層より高くなっている。
- ・〔学校の先生が同僚の先生のことを話す場合〕「田中先生は…」を選択した人の割合は、20代で8割台と、他の年齢層より高くなっている。「田中教諭は…」は60代で、「田中さんは…」は16～19歳で、他の年齢層より高くなっている。
- ・〔病院の医師が同僚の医師のことを話す場合〕「木村先生は…」を選択した人の割合は、20～30代で5割後半と、他の年齢層より高くなっている。「木村医師は…」は、60代以上で他の年齢層より高くなっている。

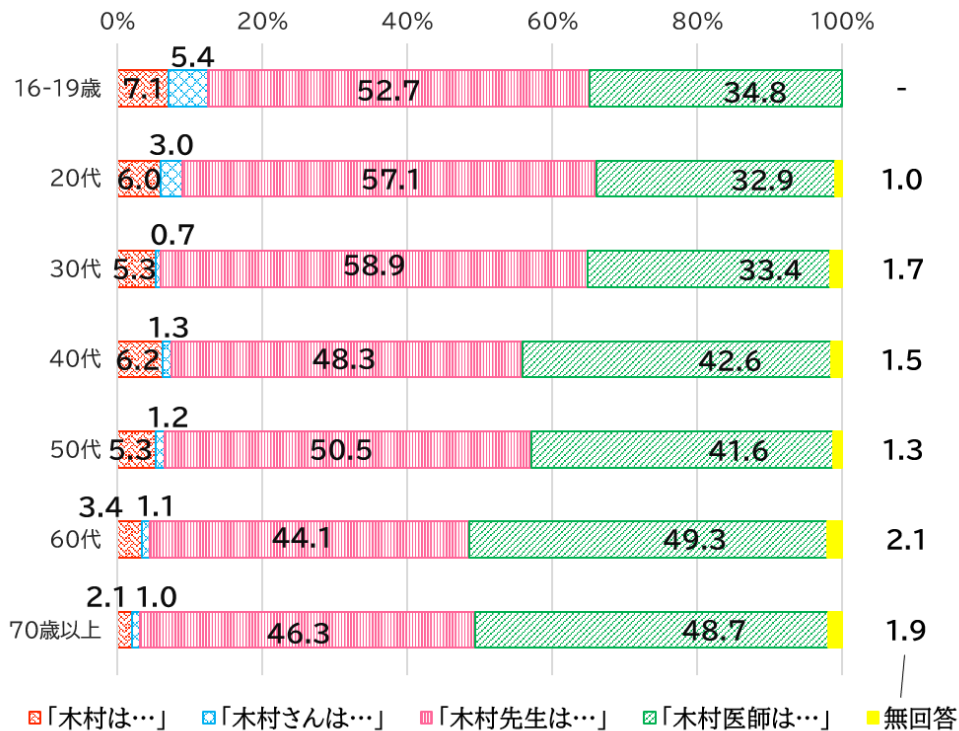


<問 13～15> 外部の人への言い方（年齢別） 続き

<問14> 学校の先生が同僚の先生のことを話す場合



<問15> 病院の医師が同僚の医師のことを話す場合



Ⅳ 言葉遣いと外来語表記に関する意識

<問16> 二つの言い方（「れる／られる」「せる／させる」など）（* p.46）

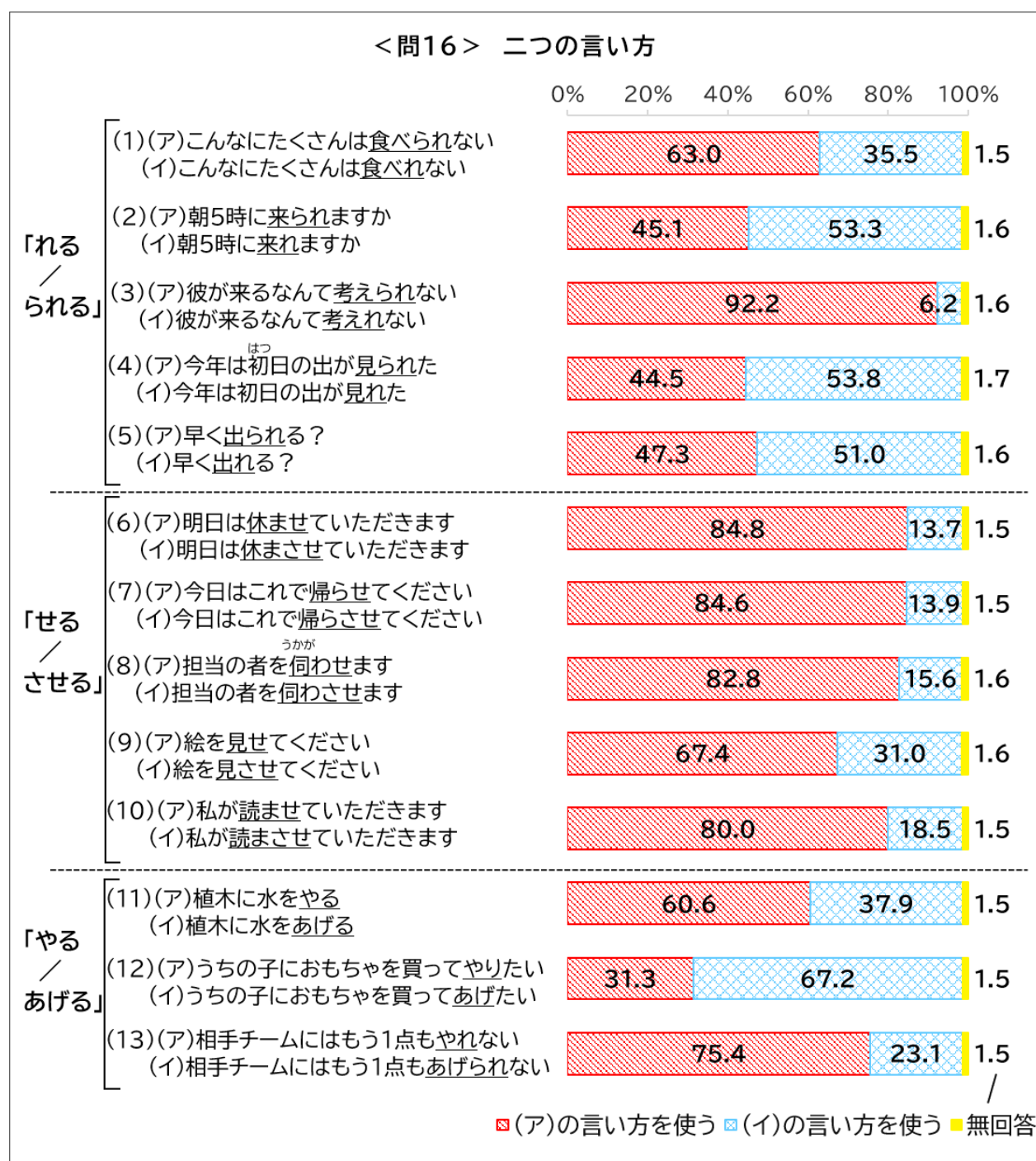
— 「見れた」「来れます」「出れる」を使うのは5割台、「食べれない」は3割台半ば —

〔問16：質問〕

次の（1）～（13）それぞれに挙げた二つの言い方のうち、あなたが普通使うものはどちらですか。（一つずつ回答）

〔問16：全体の結果〕

結果は、次のグラフのとおり。（選択肢はグラフに示している。）



このうち、(1)～(5)は「れる／られる」が後に続く言い方について尋ねたものである。なお、「食べれない」、「来れますか」、「考えれない」、「見れた」、「出れる？」は、共通語においては改まった場で用いるのは適當ではないとされてきており、新聞などでもほとんど用いられていない。これらは、上一段活用、下一段活用、力行変格活用の動詞の可能表現である。この場合、辞書等では、動詞の未然形に可能の助動詞「られる」が付いた「見られる」「出られる」「来られる」などが本来の形であり、「見れる」「出れる」「来れる」などの形は、五段活用動詞（「読む」「書く」など）から生じる下一段活用の可能動詞（「読める」「書ける」など）などの影響によるものと考えられるとされている。

(6)～(10)は「せる／させる」が後に続く言い方について尋ねたものである。このうち、「休まさせていただきます」、「帰らせてください」、「伺わさせます」、「読まさせていただきます」の四つの言い方は、共通語においては適當ではないとされており、新聞などでもほとんど用いられていない。これらは、五段活用の動詞の使役表現である。この場合、辞書等では、動詞の未然形に使役の助動詞「せる」が付いた「休ませる」「帰らせる」などが本来の形であるとされている。

ただし、(9)で取り上げた、「見せてください／見させてください」は、どちらも文法的には問題のない表現である。「見せてください」は、下一段活用の動詞「見せる」の連用形に接続助詞「て」と「ください」が付いた形、「見させてください」は、上一段活用の動詞「見る」の未然形に、使役の助動詞「させる」と「て」と「ください」が付いた形である。

(11)～(13)は「やる／あげる」について尋ねたものである。(11)の文について、「敬語の指針」（平成19年文化審議会答申）では、「植木に水をあげる」という場合の「あげる」は、旧来の規範からすれば誤用とされるものであるが、この語の謙讓語から美化語に向かう意味的な変化は既に進行し、定着しつつあると言ってよい。」としている。(12)(13)についても同様に考えられるが、言葉によっては定着しつつあるとまで言えない場合もある。

〔 問 16：年代別の結果・（参考）過去の調査結果 〕

年代別に見ると、それぞれ次のグラフのとおり。

また、調査方法が変わったため、令和元（2019）年度以前の調査結果については参考値となり、今回（令和7年度）の調査結果との比較に注意が必要だが、過去の調査結果（平成7、12、17、22、27、令和2年度）を、それぞれグラフに示す。なお、平成27（2015）年度以前の調査では、今回調査にない項目である「どちらも使う」がある。

(1) (ア) こんなにたくさんは食べられない

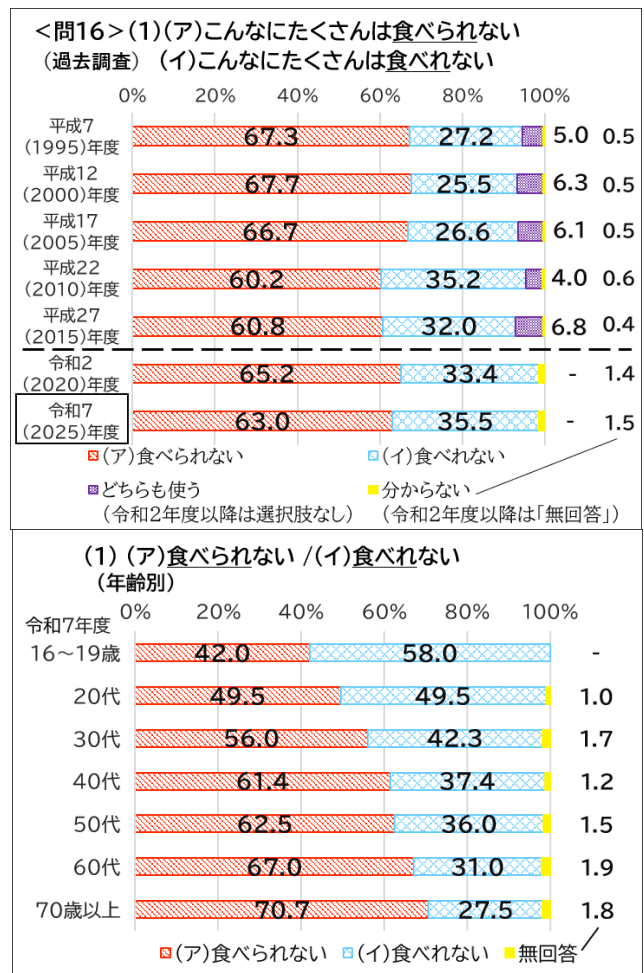
(イ) こんなにたくさんは食べれない

過去の調査結果（令和 2（2020）年度）と比較すると、「(ア) こんなにたくさんは食べられない」を選択する人の割合は 2 ポイント減少し、「(イ) こんなにたくさんは食べれない」の割合は 2 ポイント増加している。

平成 27（2015）年度以前は、「(ア) 食べられない」が減少傾向にあった。

年齢が上がるに従って「(ア) 食べられない」が高くなり、70 歳以上では 70.7%となっている。一方、年齢が下がるに従って「(イ) 食べれない」が高くなり、16～19 歳では半数を超えている。

* 調査方法の変更のため、平成 27（2015）年度以前の調査結果は参考値となり、比較には注意が必要



(2) (ア) 朝5時に来られますか

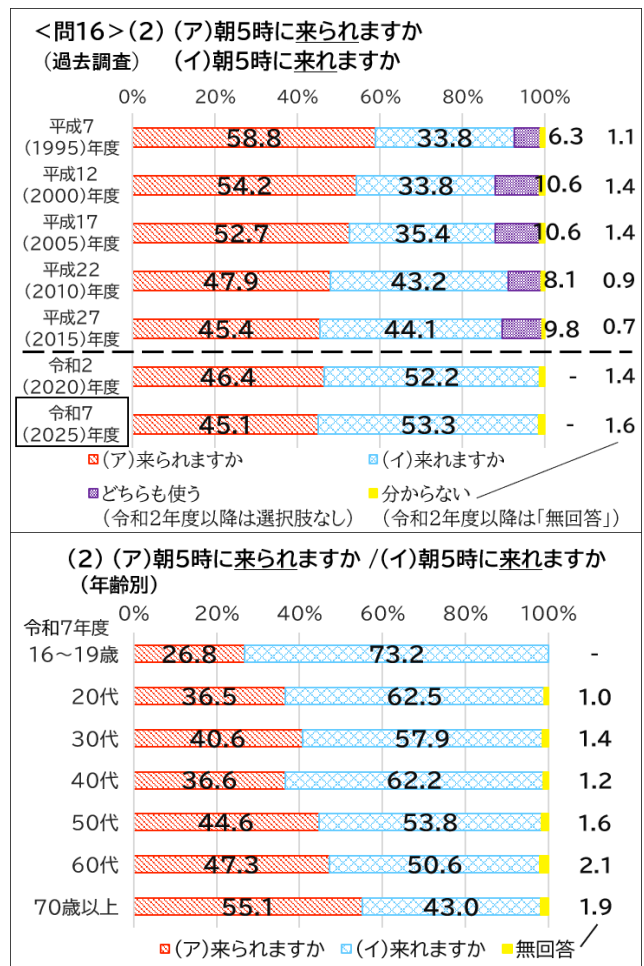
(イ) 朝5時に来れません

過去の調査結果（令和 2（2020）年度）と比較すると、余り変化は見られない。

平成 27（2015）年度以前は、「(ア) 朝5時に来られますか」を選択する人の割合が減少傾向にあった。

60 代以下では、「(イ) 朝5時に来れません」の割合が半数を超え、中でも 16～19 歳では 73.2%と最も高くなっている。

* 調査方法の変更のため、平成 27（2015）年度以前の調査結果は参考値となり、比較には注意が必要



(3) (ア) 彼が来るなんて考えられない

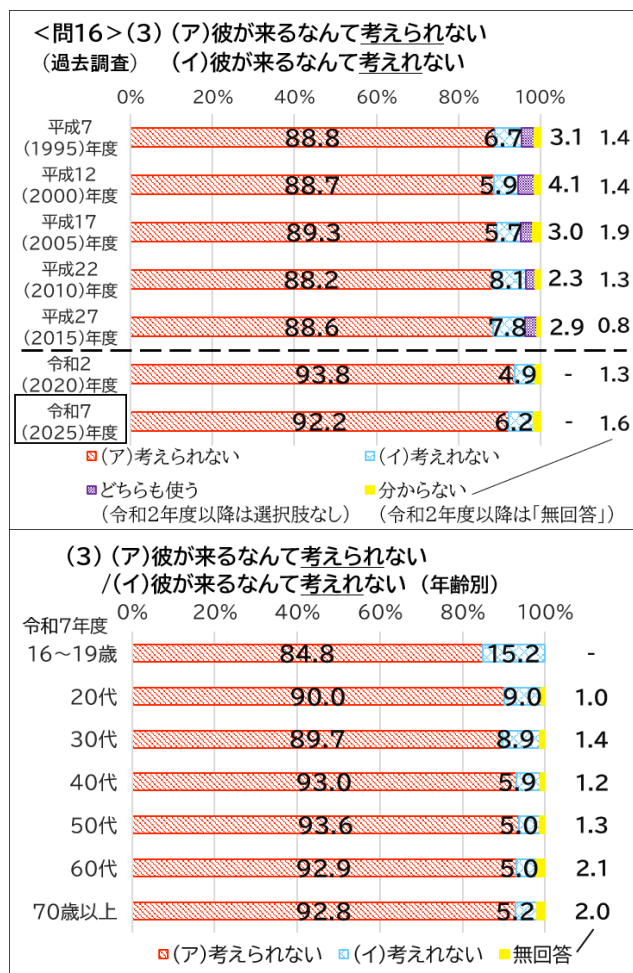
(イ) 彼が来るなんて考えれない

過去の調査結果（令和 2（2020）年度）と比較すると、余り変化は見られない。

平成 27（2015）年度以前も、特に変化は見られなかった。

全ての年代で、「(ア) 彼が来るなんて考えられない」を選択する人の割合が8割を超え、16～19 歳と30 代を除いては9割を超えている。

* 調査方法の変更のため、平成 27（2015）年度以前の調査結果は参考値となり、比較には注意が必要



(4) (ア) 今年は初(はつ)日の出が見られた

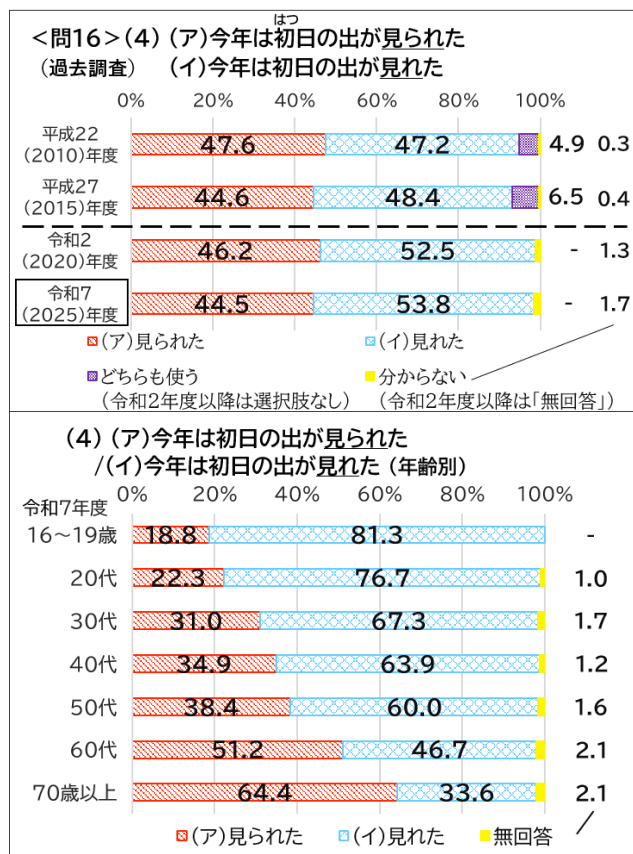
(イ) 今年は初日の出が見れた

過去の調査結果（令和 2（2020）年度）と比較すると、余り変化は見られない。

平成 27（2015）年度以前は、「(ア) 今年は初日の出が見られた」を選択する人の割合が減少傾向にあった。

年代が上がるに従って「(ア) 見られた」が高くなり、70 歳以上では 64.4%となっている。一方、50 代以下では、「(イ) 今年は初日の出が見れた」が半数を超え、16～19 歳では 81.3%と最も高くなっている。

* 調査方法の変更のため、平成 27（2015）年度以前の調査結果は参考値となり、比較には注意が必要



(5) (ア) 早く出られる？

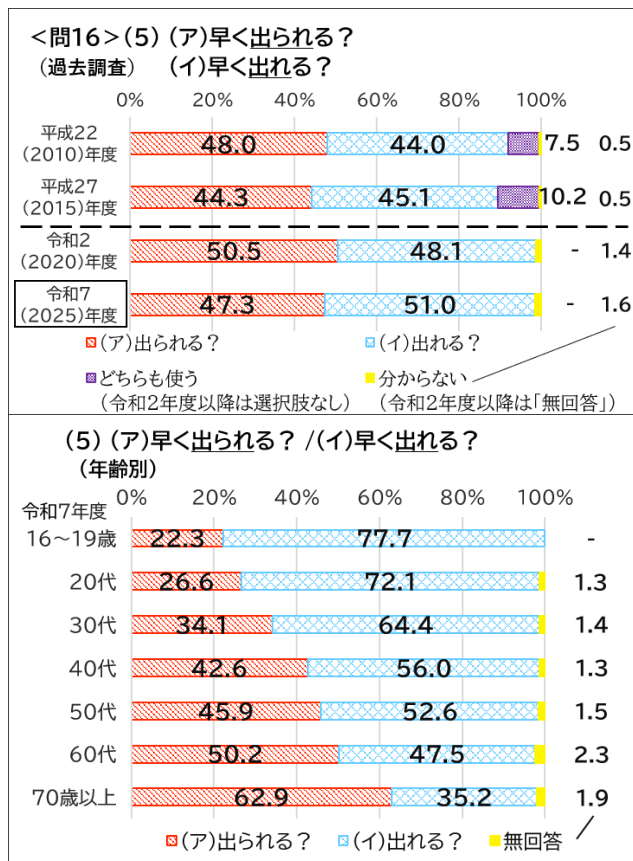
(イ) 早く出れる？

過去の調査結果（令和2（2020）年度）と比較すると、「(ア) 早く出られる？」を選択する人の割合は3ポイント減少し、「(イ) 早く出れる？」の割合は3ポイント増加している。

平成27（2015）年度以前は、「(ア) 出られる」が半数を超え、70歳以上では62.9%となっている。

60代以上で「(ア) 出られる」が半数を超え、70歳以上では62.9%となっている。一方、50代以下で「(イ) 出れる」が半数を超え、16～19歳では77.7%となっている。

* 調査方法の変更のため、平成27（2015）年度以前の調査結果は参考値となり、比較には注意が必要



<問 17> 外来語の表記 (* p.58)

— 「サステナブル」が6割台半ば、「サステイナブル」が3割弱 —

〔 問 17：質問 〕

あなたは、次の（１）～（８）の言葉を書くとしたら、次のうちのどちらの書き方にしますか。あなたのお考えに近いものをそれぞれ一つずつ選んでください。（一つずつ回答）

- | | | | |
|-----|-------------|---|-------------|
| （１） | （ア）メディシン | / | （イ）メディスン |
| （２） | （ア）サステナブル | / | （イ）サステイナブル |
| （３） | （ア）フィナンシャル | / | （イ）ファイナンシャル |
| （４） | （ア）デキャンタ | / | （イ）デカンタ |
| （５） | （ア）レクリエーション | / | （イ）レクレーション |
| （６） | （ア）リファレンス | / | （イ）レファレンス |
| （７） | （ア）スムーズ | / | （イ）スムース |
| （８） | （ア）バッジ | / | （イ）バッヂ |

〔 問 17：全体の結果、年齢別の結果 〕

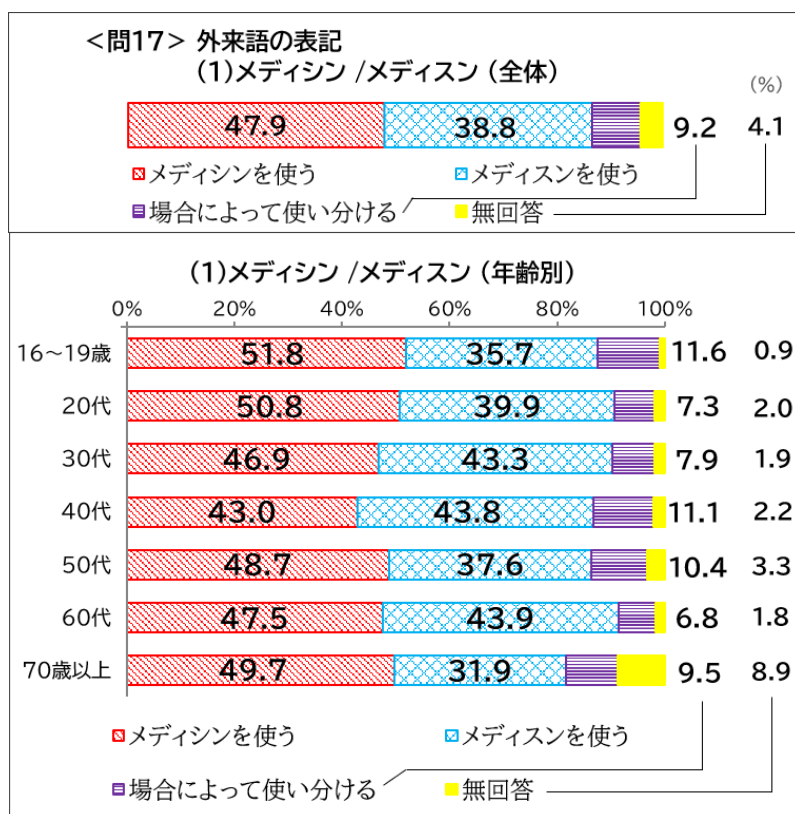
結果はそれぞれ、以下のグラフのとおり。（選択肢はグラフに示している。）

（１）（ア）メディシン

（イ）メディスン

「ア（メディシン）を使う」と答えた人が 47.9%、「イ（メディスン）を使う」と答えた人が 38.8%となっている。

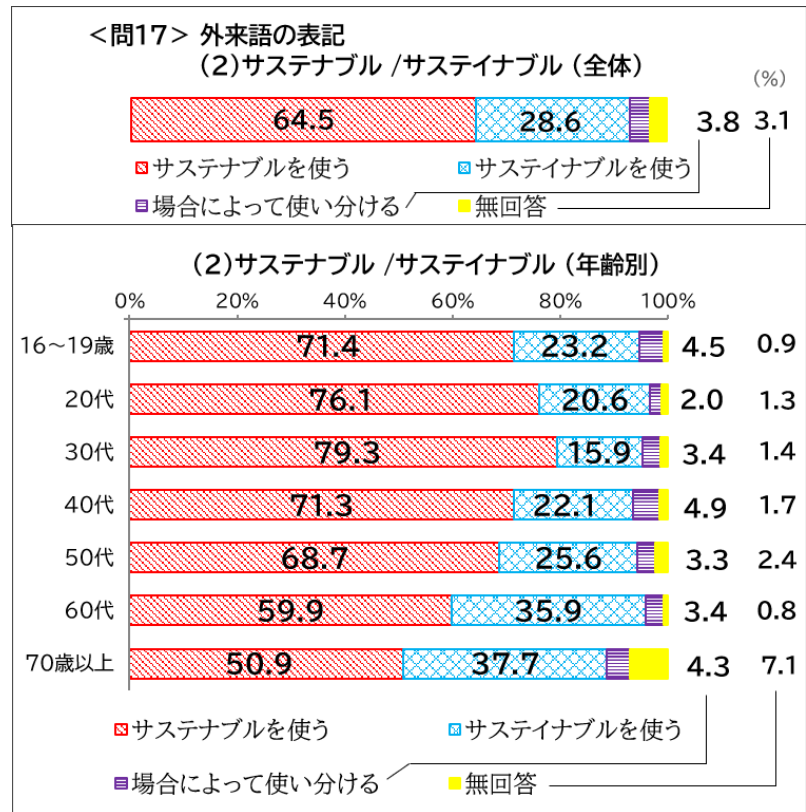
年齢別に見ると、「イ（メディスン）を使う」の割合は、30～40 代、60 代で他の年代より高く 4 割台前半となっている。



(2) (ア) サステナブル
(イ) サステイナブル

「ア（サステナブル）を使う」と答えた人が64.5%、「イ（サステイナブル）を使う」と答えた人が28.6%となっている。

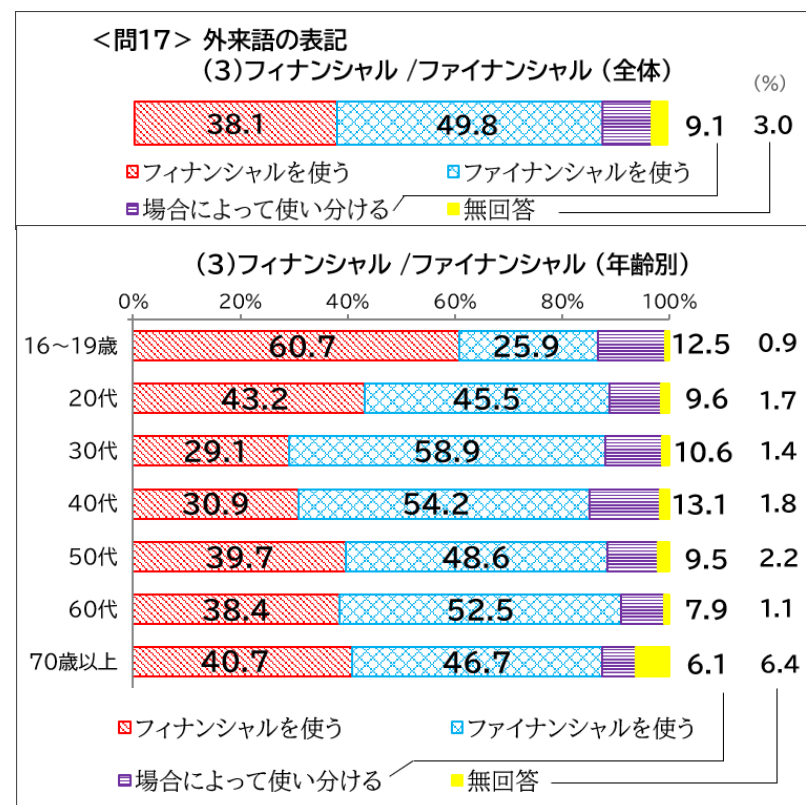
年齢別に見ると、「ア（サステナブル）を使う」の割合は、20～30代で他の年代より高く7割台後半となっている。「イ（サステイナブル）を使う」は、60代以上で他の年代より高く3割台後半となっている。



(3) (ア) フィナンシャル
(イ) ファイナンシャル

「ア（フィナンシャル）を使う」と答えた人が38.1%、「イ（ファイナンシャル）を使う」と答えた人が49.8%となっている。

年齢別に見ると、「ア（フィナンシャル）を使う」の割合は、16～19歳で他の年代より高く60.7%となっている。「イ（ファイナンシャル）を使う」は、30代（58.9%）と40代（54.2%）で他の年代より高くなっている。



(4) (ア) デキャンタ

(イ) デカンタ

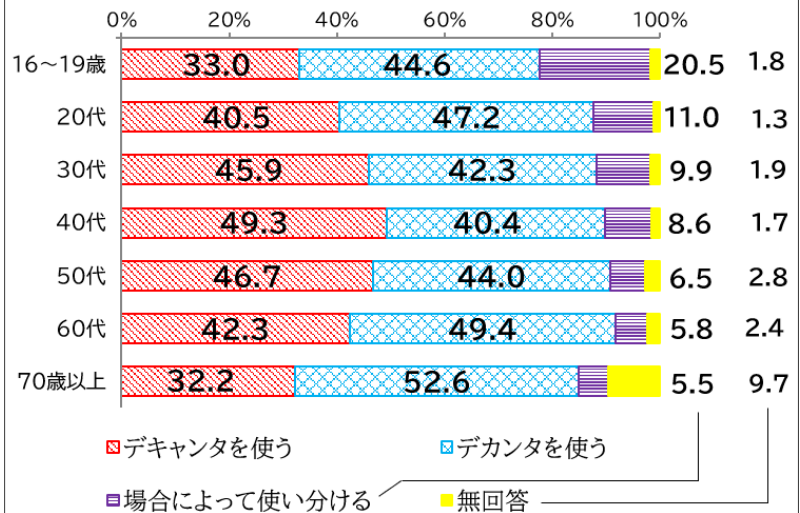
「ア（デキャンタ）を使う」と答えた人が41.4%、「イ（デカンタ）を使う」と答えた人が46.8%となっている。

年齢別に見ると、「ア（デキャンタ）を使う」の割合は、30～50代で他の年代より高く4割台後半となっている。「イ（デカンタ）を使う」は、70歳以上で他の年代より高く52.6%となっている。「場合によって使い分ける」は、16～19歳で他の年代より高く20.5%となっている。

<問17> 外来語の表記
(4)デキャンタ /デカンタ (全体)



(4)デキャンタ /デカンタ (年齢別)



(5) (ア) レクリエーション

(イ) レクレーション

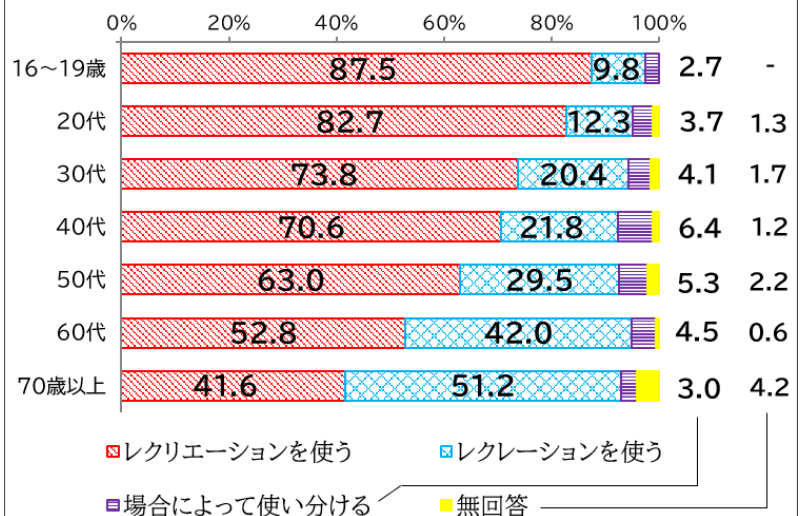
「ア（レクリエーション）を使う」と答えた人が60.0%、「イ（レクレーション）を使う」と答えた人が33.5%となっている。

年齢別に見ると、「ア（レクリエーション）を使う」の割合は、年代が下がるに従って高くなり、16～19歳で87.5%となっている。一方、「イ（レクレーション）を使う」は、年代が上がるに従って高くなり、70歳以上で51.2%となっている。

<問17> 外来語の表記
(5)レクリエーション /レクレーション (全体)



(5)レクリエーション /レクレーション (年齢別)

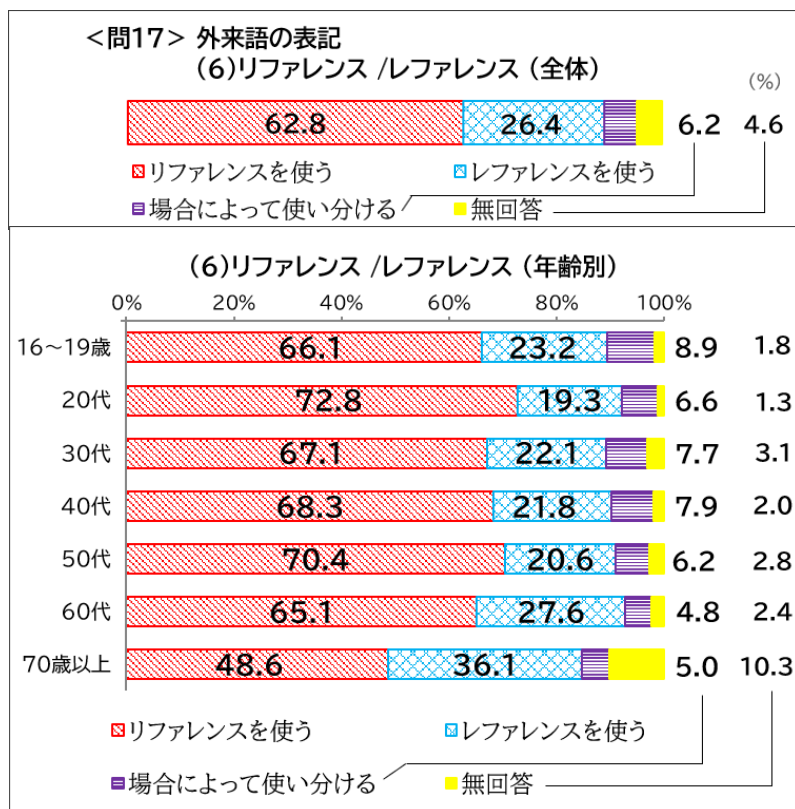


(6) (ア) リファレンス

(イ) レファレンス

「ア（リファレンス）を使う」と答えた人が62.8%、「イ（レファレンス）を使う」と答えた人が26.4%となっている。

年齢別に見ると、「ア（リファレンス）を使う」の割合は、70歳以上を除く全ての年齢層で6割台後半～7割台前半となっている。「イ（レファレンス）を使う」は、70歳以上で他の年代より高く36.1%となっている。

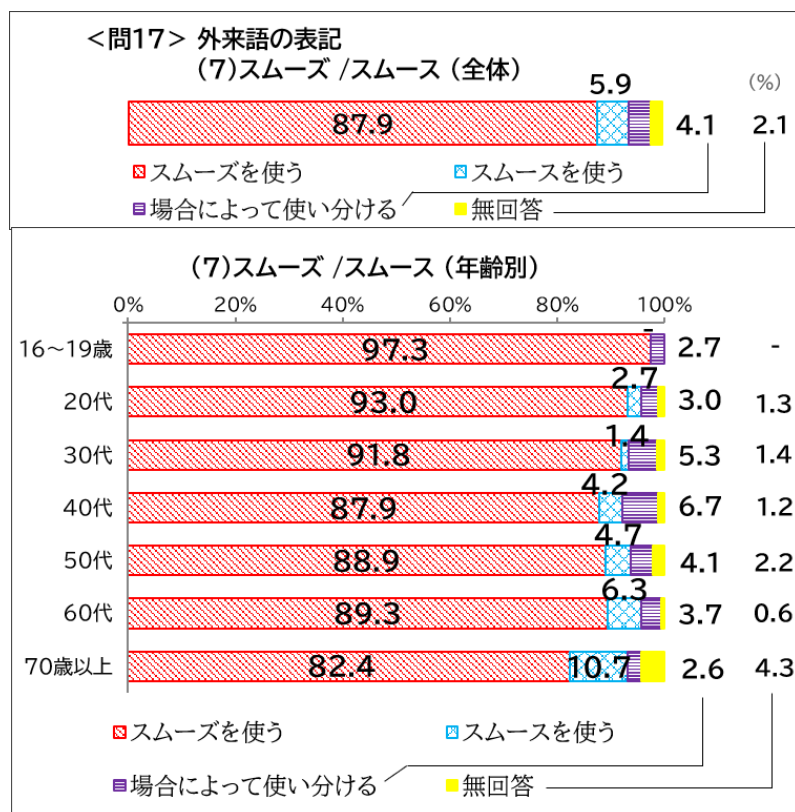


(7) (ア) スムーズ

(イ) スムース

「ア（スムーズ）を使う」と答えた人が87.9%、「イ（スムース）を使う」と答えた人が5.9%となっている。

年齢別に見ると、「ア（スムーズ）を使う」の割合は、全ての年齢層で8割を超えている。「イ（スムース）を使う」は、70歳以上で他の年代より高く10.7%となっている。

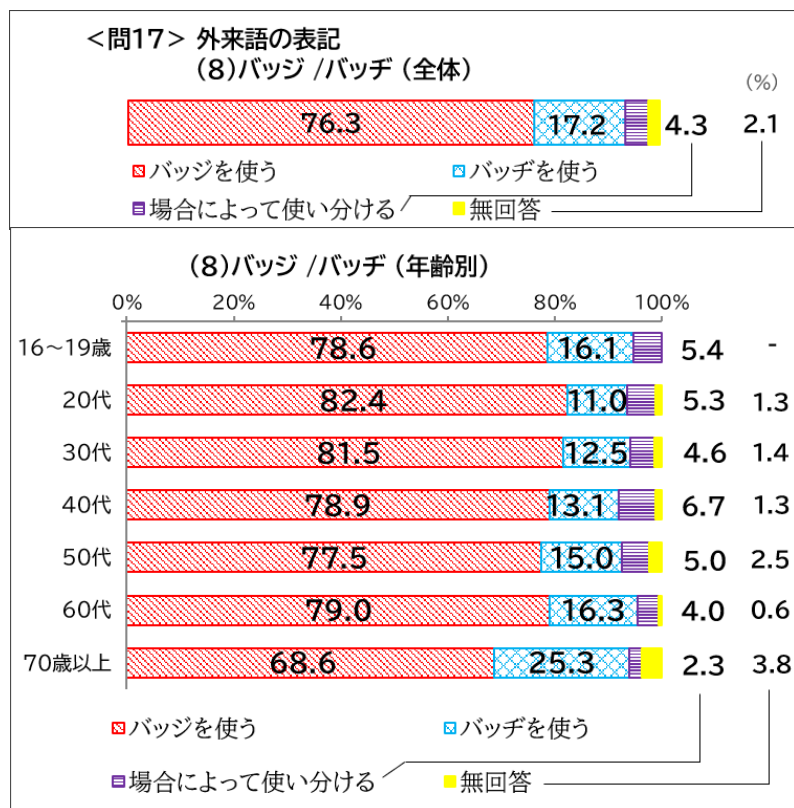


(8) (ア) バッジ

(イ) バッチ

「ア (バッジ) を使う」と答えた人が76.3%、「イ (バッチ) を使う」と答えた人が17.2%となっている。

年齢別に見ると、「ア (バッジ) を使う」の割合は、70 歳以上を除く全ての年齢層で7 割台後半～8 割台前半となっている。「イ (バッチ) を使う」は、70 歳以上で他の年代より高く 25.3%となっている。



V 言葉遣いに対する印象や慣用句等の理解

<問 18> 使うことがある言葉か（「ツーカーの」「なるはやで」等）（* p.63）

—「ツーカーの」は「使うことがある」が4割台後半—

〔問 18：質問〕

あなたは、ここに挙げた（１）～（５）の下線部分の言い方を使うことがありますか。それとも、ありませんか。（一つずつ回答）

- （１）「思い切って決める」といった意味で「えいやで決める」と言う
- （２）「複雑で滞っていることを分かりやすく整理する」といった意味で「交通整理する」と言う
- （３）「建前ではなく本音を率直に言う」といった意味で「正直ベースで言う」と言う
- （４）「一言だけで話が通じるような気心が知れている仲」といった意味で「ツーカーの仲」と言う
- （５）「可能な限り急いで」といった意味で「なるはやで」と言う

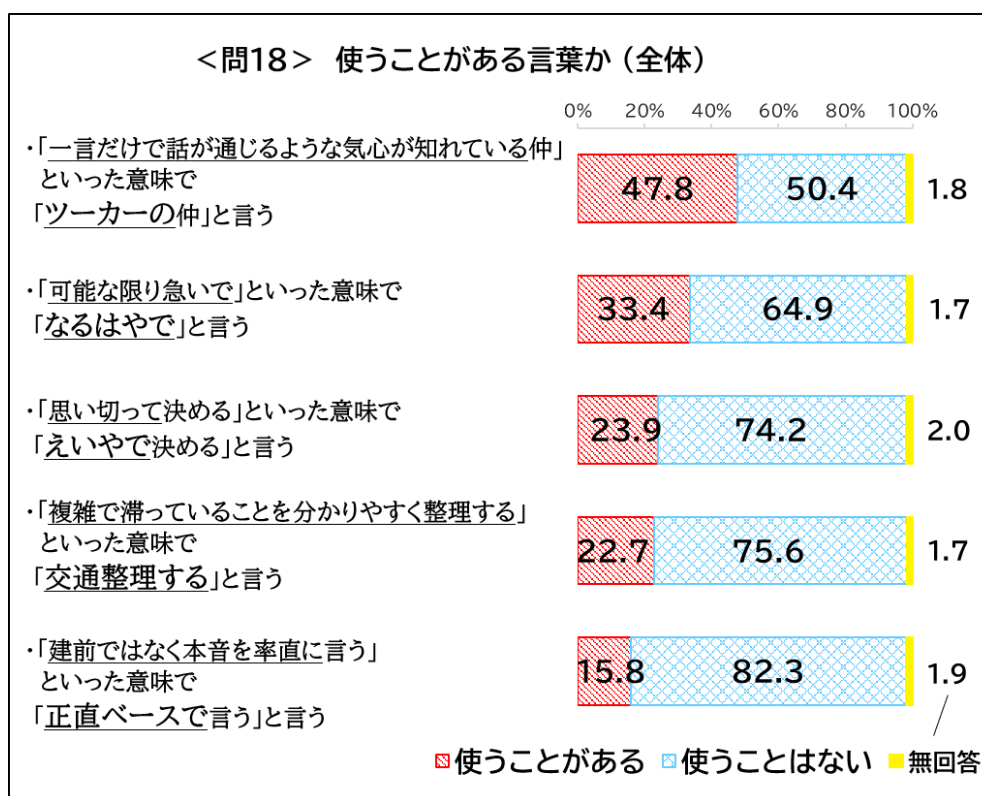
※ 調査した五つの言葉は、特定の年齢層や特定の業界で広く用いられていると見られる言葉を取り上げた。

〔問 18：全体の結果〕

結果は次のページのグラフのとおり。（選択肢はグラフに示している。）

下線部の言い方を「使うことがある」と回答した人の割合は、「ツーカーの」が47.8%、「なるはやで」が33.4%、「えいやで」が23.9%、「交通整理する」が22.7%、「正直ベースで」が15.8%となっている。

一方、「使うことはない」の割合は、「正直ベースで」が82.3%、「交通整理する」が75.6%、「えいやで」が74.2%、「なるはやで」が64.9%、「ツーカーの」が50.4%となっている。



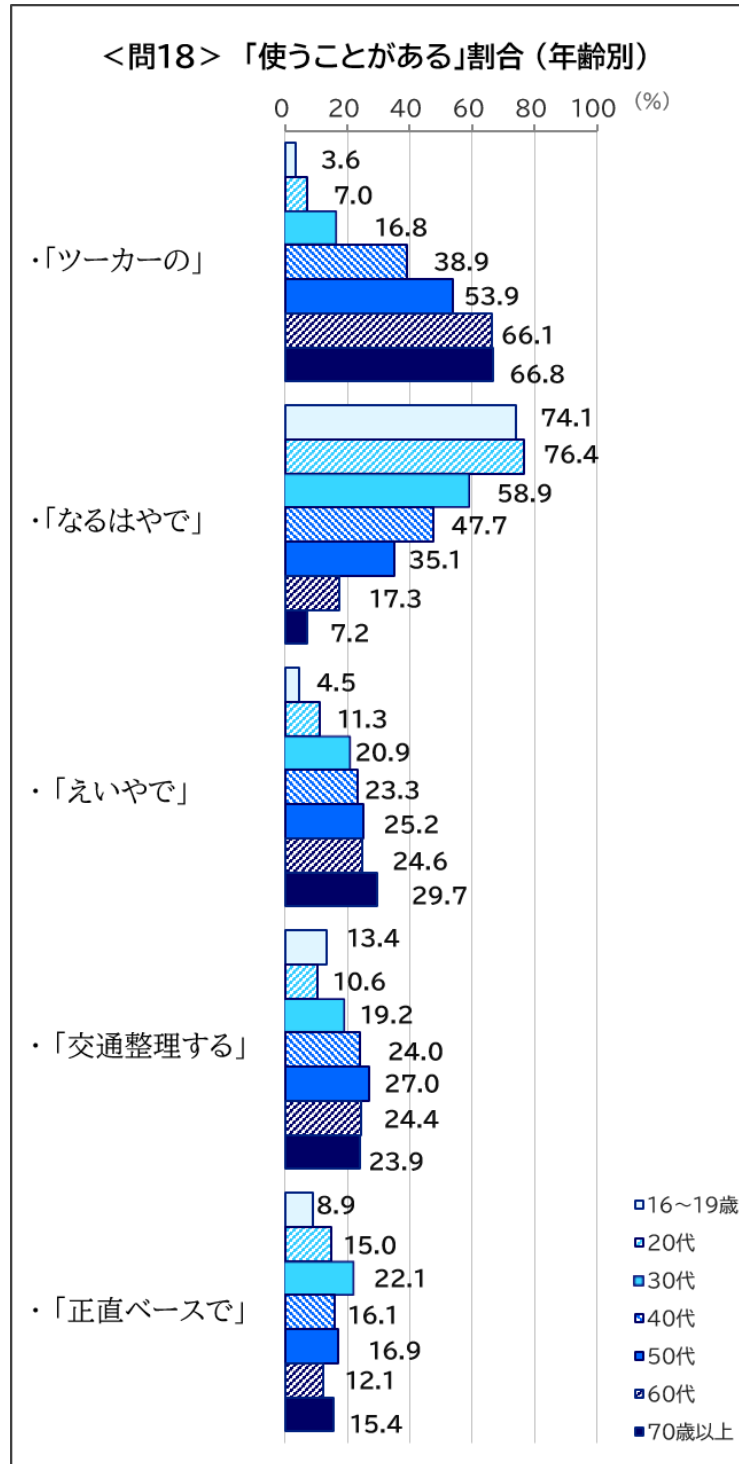
〔 問 18：年齢別の結果 〕

年齢別に「使うことがある」を選択した人の割合を見ると、次のグラフのとおり。

「ツーカーの」「えいやで」を選択した人の割合は、おおむね年齢が上がるに従って高くなり、「ツーカーの」は60代以上で6割台後半、「えいやで」は70歳以上で約3割となっている。

一方、「なるはやで」は、おおむね年齢が下がるに従って高くなり、20代以下で7割台となっている。

「交通整理する」は40代以上で、「正直ベースで」は30代で、ほかの年齢層より高く、2割台となっている。



<問 19> 気になる言葉か（「ツーカーの」「なるはやで」等）（＊ p.66）

—「えいやで」「正直ベースで」は「気になる」が4割台後半—

〔 問 19：質問 〕

ここに挙げた（１）～（５）の下線部分の言い方をほかの人が使うのが気になりますか。それとも、気になりませんか。（一つずつ回答）

- （１）「思い切って決める」といった意味で「えいやで決める」と言う
- （２）「複雑で滞っていることを分かりやすく整理する」といった意味で「交通整理する」と言う
- （３）「建前ではなく本音を率直に言う」といった意味で「正直ベースで言う」と言う
- （４）「一言だけで話が通じるような気心が知れている仲」といった意味で「ツーカーの仲」と言う
- （５）「可能な限り急いで」といった意味で「なるはやで」と言う

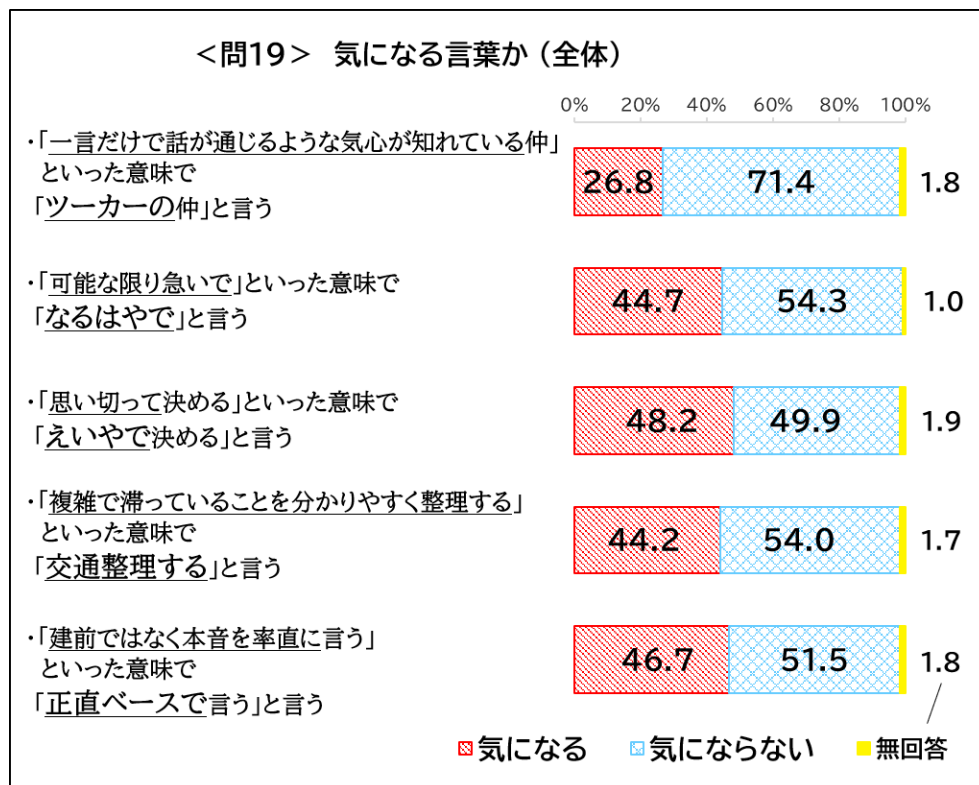
※ 調査した五つの言葉は、特定の年齢層や特定の業界で広く用いられていると見られる言葉を取り上げた。

〔 問 19：全体の結果 〕

結果は次のページのグラフのとおり。（選択肢はグラフに示している。並び順は問 18 に合わせている。）

下線部の言い方を「気にならない」と回答した人の割合は、「ツーカーの」が71.4%、「なるはやで」が54.3%、「交通整理する」が54.0%、「正直ベースで」が51.5%、「えいやで」が49.9%となっている。

一方、「気になる」の割合は、「えいやで」が48.2%、「正直ベースで」が46.7%、「なるはやで」が44.7%、「交通整理する」が44.2%、「ツーカーの」が26.8%となっている。



〔 問 19：年齢別の結果 〕

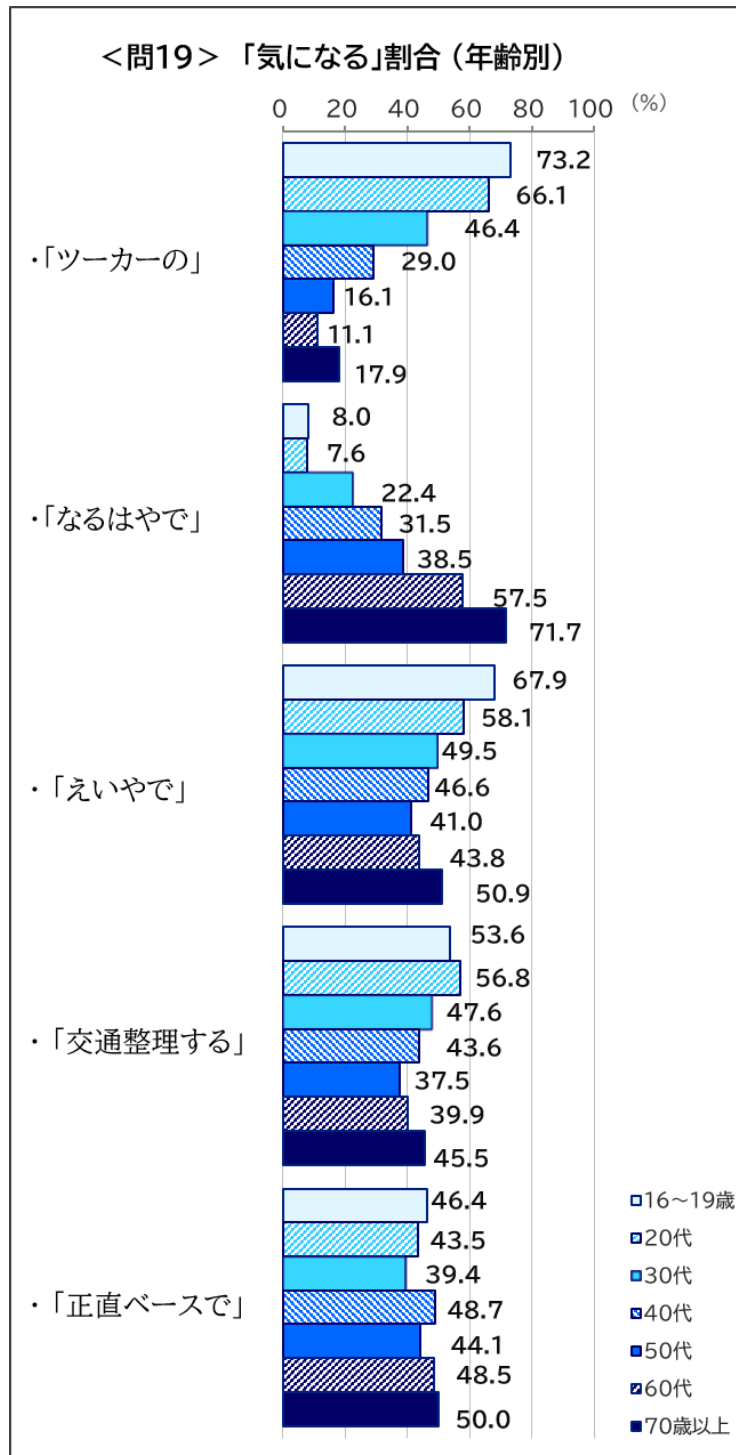
年齢別に「気になる」を選択した人の割合を見ると、次のグラフのとおり。（並び順は問 18 に合わせている。）

「ツーカーの」を選択した人の割合は、おおむね年齢が下がるに従って高くなり、16～19 歳で 7 割台となっている。

一方、「なるはやで」は、おおむね年齢が上がるに従って高くなり、70 歳以上で 7 割台となっている。

「えいやで」は、20 代以下で 5 割台後半～6 割台と、ほかの年齢層より高くなっている。

「交通整理する」は 20 代以下で 5 割台と、ほかの年齢層より高くなっている。



<問 20> どちらの意味だと思うか（「ひもとく」「気が置けない」等）（＊ p.69）

— 「ひもとく」「流れに棹さす」「嘖飯もの」は、
本来の意味とされてきたものとは異なる方が多く選択されている —

〔 問 20：質問 〕

ここに挙げた（１）～（５）の言葉は、それぞれ（ア）と（イ）のどちらだと思いますか。
（一つずつ回答）

- （１）ひもとく （２）佳境に入る （３）流れに棹(さお)さす
（４）気が置けない （５）嘖飯もの

〔 問 20：全体・（参考）過去の調査結果 〕

結果は下の表のとおり。（選択肢は表に示している。）

なお、辞書等で主に本来の意味とされてきたものを太字で記した。

今回尋ねた五つの語句のうち、（１）「ひもとく」、（３）「流れに棹さす」、（５）「嘖飯もの」は、辞書等で本来の意味とされてきたものとは異なる方が多く選択されるという結果となっている。また、（２）「佳境に入る」、（４）「気が置けない」は、辞書等で本来の意味とされてきたものが選択されている割合と、そうでないものの割合とが拮抗している。

また、調査方法が変わったため、令和元（2019）年度以前の調査結果については、今回（令和 7 年度）の調査結果との比較に注意が必要だが、過去の調査結果を参考値として表に示す。

〈 問 20 どちらの意味だと思うか 〉（数字は％）

(1)	ひもとく 例：古代史をひもとく	令和 7 (2025)年度
	(ア)関係する書物を読む	13.1
	(イ) 真相を明らかにする	69.9
	(ア) と (イ) の両方	15.0
	(ア) や (イ) とは、全く別の意味	1.2
	無回答	0.9
(2)	佳境に入る	令和 7 (2025)年度
	(ア) 仕事などが最盛期や大詰めを迎える	37.8
	(イ)物語などが特に興味深い場面になる	34.3
	(ア) と (イ) の両方	26.2
	(ア) や (イ) とは、全く別の意味	0.6
	無回答	1.1

〈 問 20 どちらの意味だと思うか（続き） 〉（数字は％）

	流れに棹さす 例：その発言は流れに棹さすものだ	令和 7 (2025)年度	平成 24 (2012)年度	平成 18 (2006)年度	平成 14 (2002)年度
(3)	(ア) 傾向に逆らって、ある事柄の勢いを失わせるような行為をする	68.9	59.4	62.2	63.6
	(イ)傾向に乗って、ある事柄の勢いを増すような行為をする	22.7	23.4	17.5	12.4
	(ア) と (イ) の両方	5.1	1.6	1.5	1.1
	(ア) や (イ) とは、全く別の意味	1.7	1.4	0.3	1.5
	無回答	1.6			
	分からない		14.2	18.5	21.4
	気が置けない 例：その人は気が置けない人ですね	令和 7 (2025)年度	平成 24 (2012)年度	平成 18 (2006)年度	平成 14 (2002)年度
(4)	(ア)相手に対して気配りや遠慮をしなくてよい	47.4	42.7	42.4	44.6
	(イ) 相手に対して気配りや遠慮をしなくてはならない	44.3	47.6	48.2	40.1
	(ア) と (イ) の両方	4.3	1.2	1.4	2.2
	(ア) や (イ) とは、全く別の意味	3.2	4.7	1.4	6.3
	無回答	0.9			
	分からない		3.8	6.7	6.9
	嘖飯もの 例：彼の発言は嘖飯ものだ	令和 7 (2025)年度	平成 24 (2012)年度		
(5)	(ア) 腹立たしくて仕方ないこと	55.1	49.0		
	(イ)おかしくてたまらないこと	34.1	19.7		
	(ア) と (イ) の両方	5.6	1.1		
	(ア) や (イ) とは、全く別の意味	2.9	2.8		
	無回答	2.3			
	分からない		27.4		

* 調査方法の変更のため、令和元（2019）年度以前の調査結果は参考値となり、比較には注意が必要。

〔 問 20：年齢別の結果 〕

(1) ～ (5) について年齢別に見ると、次のグラフのとおり。

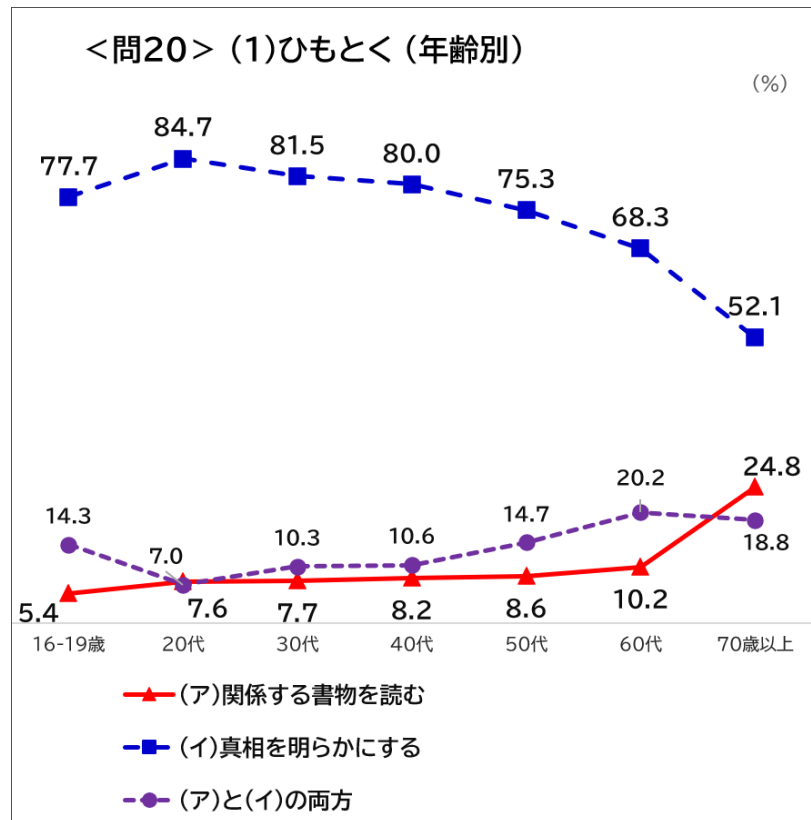
※ 辞書等で主に本来の意味とされてきたものを実線 (—▲) で表示した。

(1) ひもとく

全ての年齢層で、辞書等で本来の意味とされてきたものとは異なる

(イ)「真相を明らかにする」を選択した人の割合が、本来の意味とされてきた(ア)「関係する書物を読む」を20ポイント以上、上回っている。

おおむね年齢が低くなるほど、その傾向は強くなり、50代以下では(ア)を選択した人の割合と(イ)を選択した人との割合に60ポイント以上の差がある。

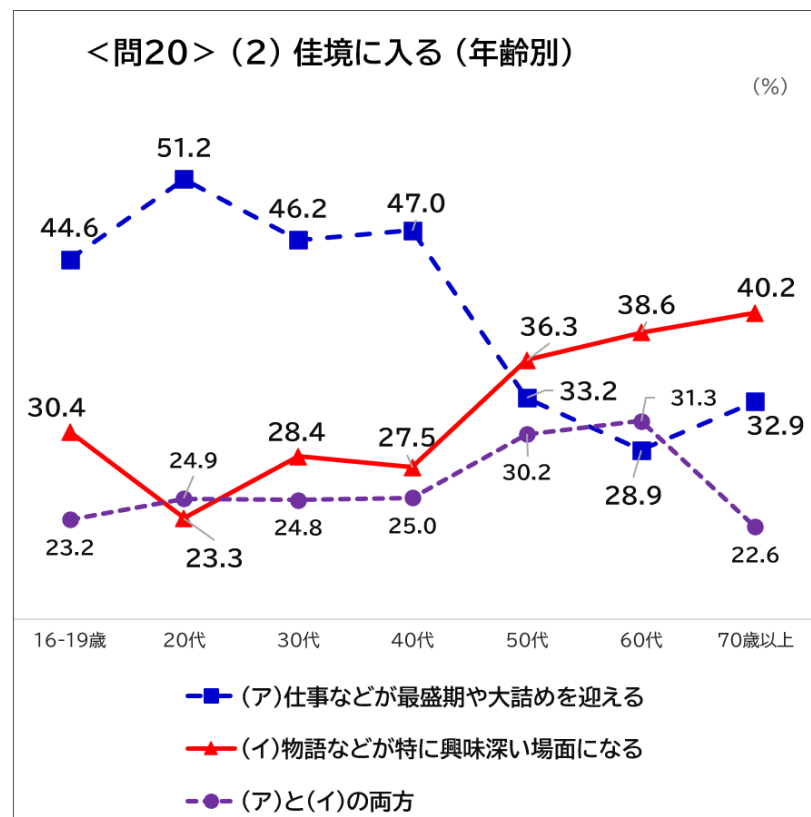


(2) 佳境に入る

40代以下で、辞書等で本来の意味とされてきたものとは異なる(ア)

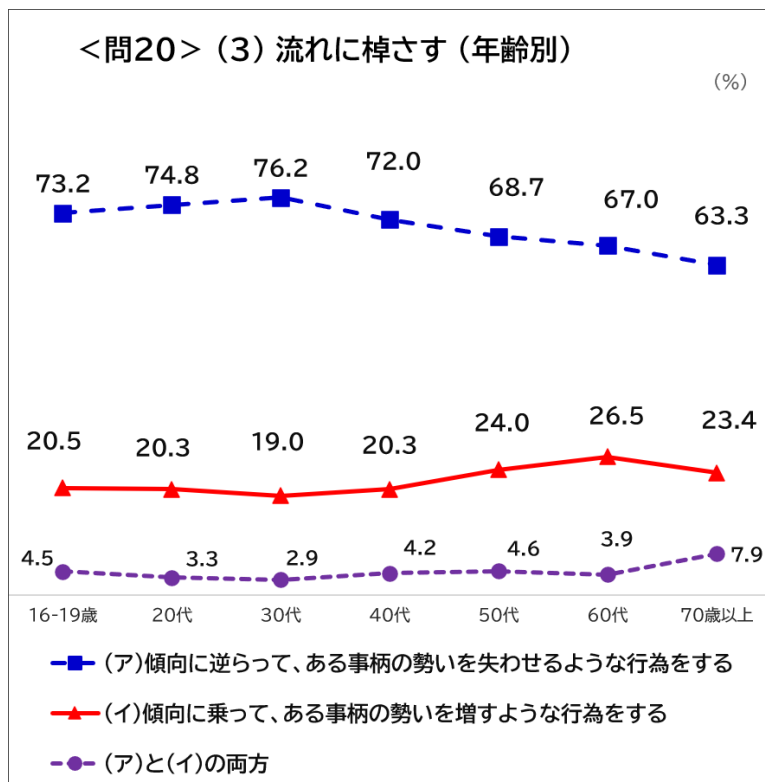
「物語などが最盛期や大詰めを迎える」を選択した人の割合が、本来の意味とされてきた(イ)「物語などが特に興味深い場面になる」を上回っている。

一方、本来の意味とされてきた(イ)「物語などが特に興味深い場面になる」を選択した人の割合は、16～19歳を除いて、おおむね年齢が上がると高くなり、70歳以上で40.2%と最も高くなっている。



(3) 流れに棹さず

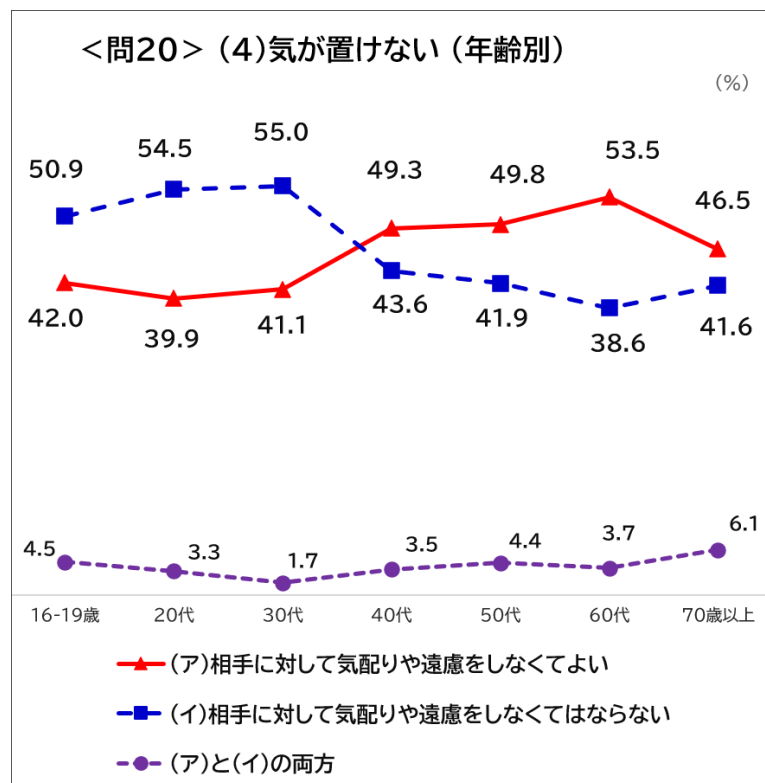
全ての年齢層で、辞書等で本来の意味とされてきたものとは異なる(ア)「傾向に逆らって、ある事柄の勢いを失わせるような行為をする」を選択した人の割合が、本来の意味とされてきた(イ)「傾向に乗って、ある事柄の勢いを増すような行為をする」を30ポイント以上、上回っている。



(4) 気が置けない

40代以上で、辞書等で本来の意味とされてきた(ア)「相手に対して気配りや遠慮をしなくてよい」を選択した人の割合が、本来の意味とされてきたものとは異なる(イ)「相手に対して気配りや遠慮をしなくてはならない」を上回っている。

一方、30代以下で、本来の意味とされてきたものとは異なる(イ)「相手に対して気配りや遠慮をしなくてはならない」を選択した人の割合が、本来の意味とされてきた(ア)「相手に対して気配りや遠慮をしなくてよい」を上回っている。



(5) 嘔飯もの

全ての年齢層で、辞書等で本来の意味とされてきたものとは異なる(ア)「腹立たしくて仕方ないこと」を選択した人の割合が、本来の意味とされてきた(イ)「おかしくてたまらないこと」を10ポイント以上、上回っている。

